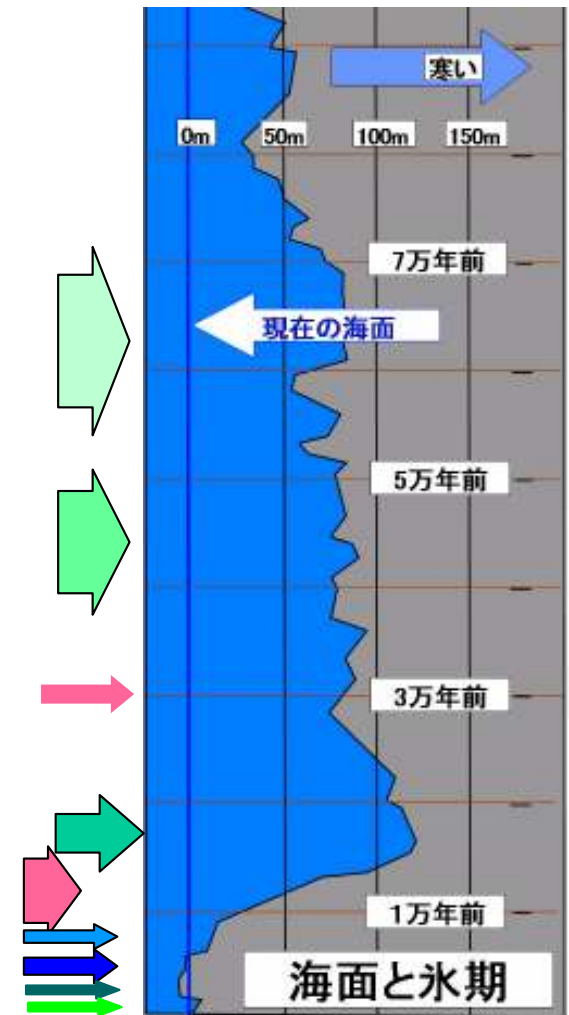
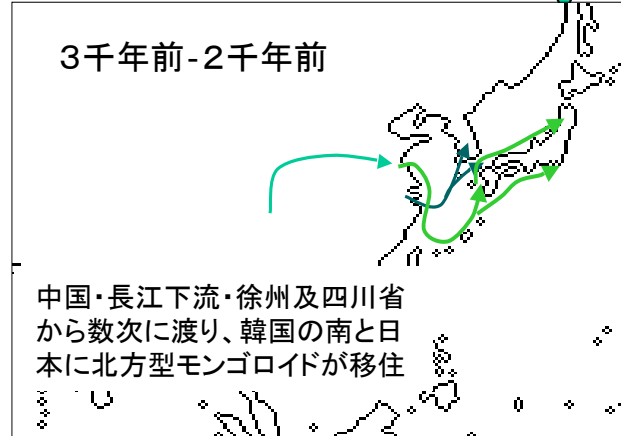
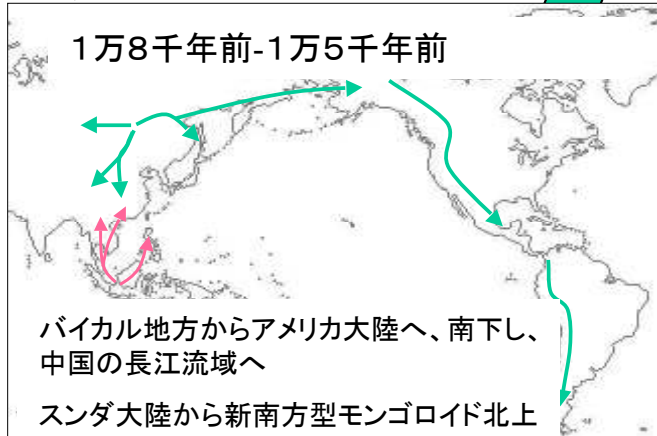
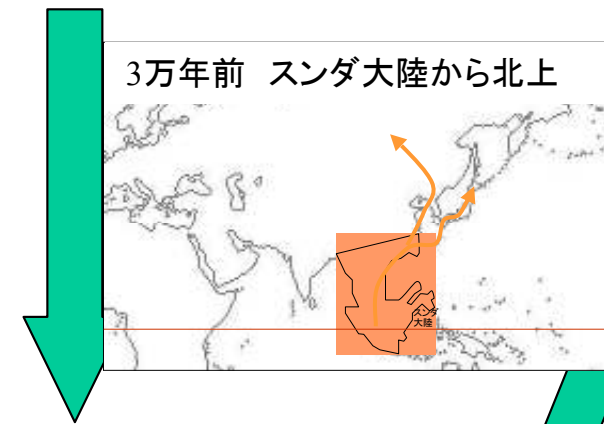
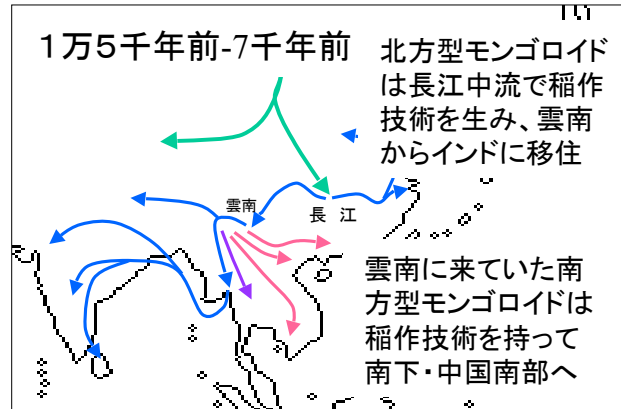
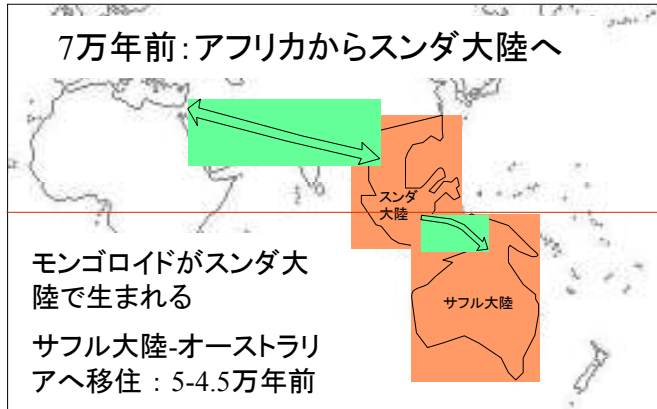


試論：DNA-日本人の起源とモンゴロイド

初稿-2009年11月8日 丸地三郎記

- 日本人の起源を探る切り札として期待されているのが、DNA-遺伝子。解析が進む中、未だ、納得の行く道筋が示されていない。
- 血清の免疫グロブリンGの標準遺伝子に関して、世界レベルのデータ収集結果が発表され、ミトコンドリアDNAの解析結果の発表などから、日本人が属するモンゴロイドと日本人の起源を示す道筋がきれいに見えてきた。
- その道筋を「試論」として記します。是非、ご覧になり、一緒に考えてみて下さい。
- この試論の記述に先立ち、上記の世界レベルのデータを収集し、発表された大阪医科大学名誉教授の松本秀雄先生と、その論文：The origin of the Japanese race based on genetic markers of immunoglobulin G 「免疫グロブリンGの標識遺伝子に基づく日本民族の起源」、の所在を教えてくださいました「日本人の起源」<http://www.geocities.jp/ikoh12/index.html> を掲載されている伊藤俊幸さんに感謝の意を表します。然りながら、お二人の方の示された論旨とはかけ離れた道筋を記すこととなります。
- 試論の構成
 - 概要
 - 松本秀夫氏の図表と論文のサマリー
 - 現代に残されたDNAから民族移住の歴史を辿るための、簡易モデルによる思考方法の整理
 - 移動ルート
 - ルートと残された遺伝子
 - 試論の検証と日本人の起源サマリー

概要 モンゴロイドの移動ルート

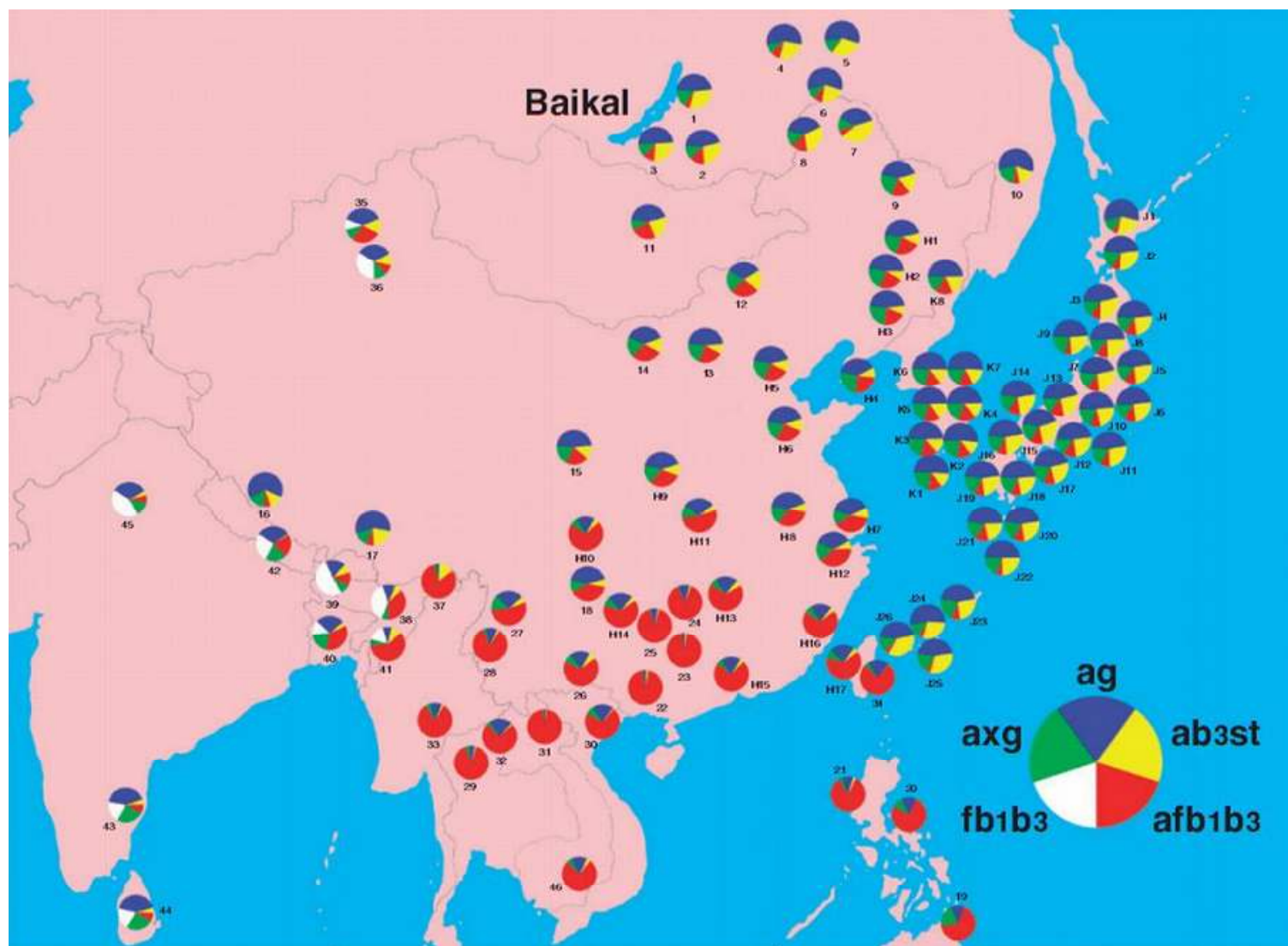


10万年前から始まる氷河期の中で、やや温暖化の時期、厳寒期が民族の移動の条件となった。
海面が下がる事は寒気の厳しさを示し、移動の要件ともなる。

松本氏の論文 免疫グロブリンGの標識遺伝子に基づく日本民族の起源 主旨

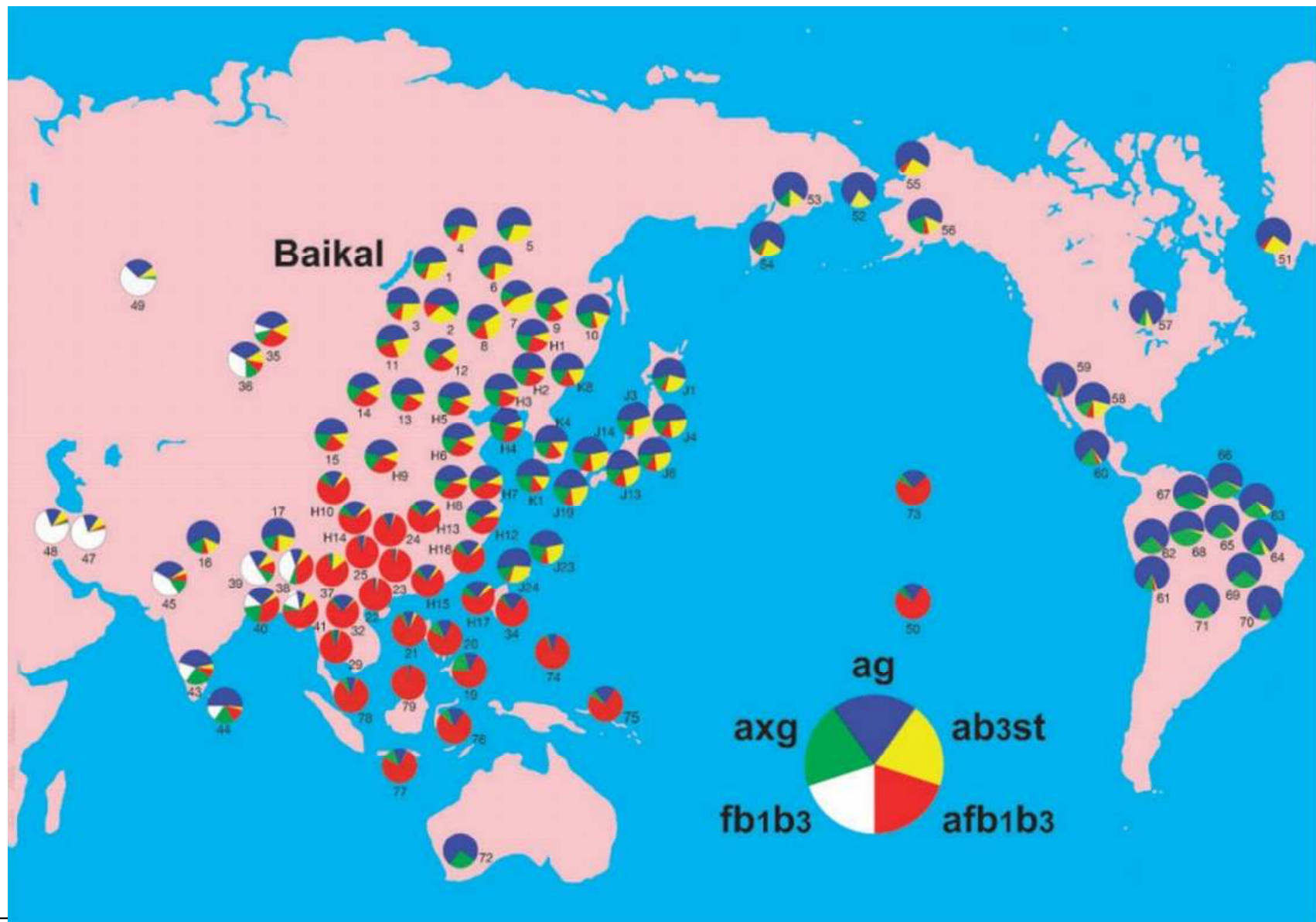
- 松本氏の論文を要約してみると、
 - 現代の、世界中のモンゴロイド130集団の血液から血清の遺伝子免疫グロブリンG(Gmと記す)を調べ、その標識遺伝子の保有率を、調べ、結果を分析した結果をまとめ、日本民族の起源を示している。
 - モンゴロイドは、2つの集団に明確に分けられる。
 - 北方型モンゴロイド: agとab3stの頻度が高い、afb1b3の頻度が極端に低い
 - 南方型モンゴロイド: agとab3stの頻度が低い、afb1b3の頻度が極端に高い
 - アイヌと琉球島民は、一般的な日本人集団よりもより著しい北方型モンゴロイドグループに属する
 - 日本人は、異質であることが認められるアイヌも琉球島民を含めて、全て北方型
 - 北方型は、シベリア・バイカル地域に起源する可能性が最も高い
 - 日本人の「二重構造モデル」に記された琉球・アイヌ:縄文人の南方起源説は否定された。
- その根拠として
 - 北方モンゴロイドの標識遺伝子であるGm ab3st遺伝子はバイカル地域で最も高い頻度で見られ、そこから、規則正しくモンゴル人、チベット人、ヤクート、オロチョン、ツングース、韓国人、日本人、アイヌへと高い頻度を保ったまま流れている。明瞭な遺伝子勾配が見られた。分散の中心は、バイカル地域にあると考えられる。
 - 篠田謙一と金井理の分析や、最新の篠田の著書によると、中妻遺跡から発掘された縄文人骨の多くは、日本人の1.3%(低頻度)にしか存在しない、mtDNA M10遺伝子を持っており、またバイカル地域に住んでいるブリアートのDNAもそれと同一の塩基配列を持っている。これはバイカル地域から日本への流れの証拠。
 - 台湾の土着民と中国から移住した台湾人共に、典型的な南方型。また、フィリピンの島々のネグリトは、北方のモンゴロイドに特有のGm ab3st遺伝子は持っていない。沖縄に、南から移住したと考えるのは困難である。
 - 南方型モンゴロイドの、Gm afb1b3遺伝子の拡散の中心は、中国南部の雲南省と広西チワン族自治区の地域にあると結論する。
 - 日本人のルーツに関して、埴原和郎の「二重構造モデル」で縄文人(アイヌ、琉球系)は南方系統と提唱されているが、これは間違い。時代遅れの不確かな方法に基づく。骨計測のような身体的な計測値は、現在の若い世代の体格から十分理解されるように、短い期間で、栄養や環境や文化によって、簡単に変わることが知られている。

松本氏の作成した図：アジアの地域ごとの免疫グロブリンG(Gm)標識遺伝子の分布



- 血液の分析によって得られる免疫グロブリンG(Gm)の5つの標識遺伝子を持つ比率を、地域ごとに表わした図
- 比率の分布により、南方系と北方系に分けられる。
- Fb1b3遺伝子はコーカソイド(白人)系の遺伝子

松本氏の作成した図：アジアと環太平洋の地域ごとの免疫グロブリンG(Gm)標識遺伝子の分布



- 南北のアメリカ・インディアン祖先の由来が、標識遺伝子の分布で明示。
- 西アジアからインドのコーカソイド

現代に残されたDNAから民族移住の歴史を辿るための 簡易モデルによる思考方法の整理

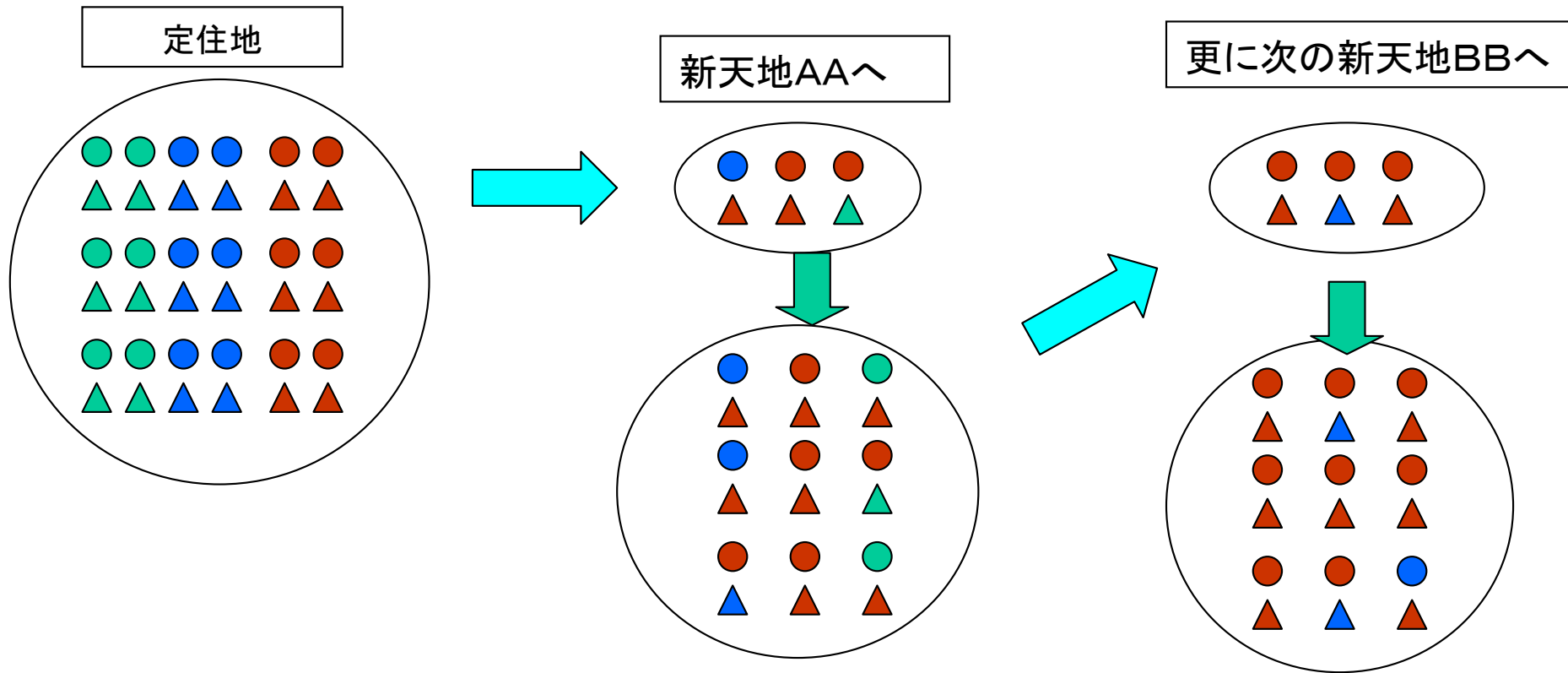
- この松本論文を見ても、DNAから人類の起源が遡ってトレース(追跡)できる時代になってきたことは大変喜ばしいことであるが、性急な民族の起源の断定には、危惧の念を抱かせる。
- そこで、ある民族のDNAを辿る場合、人の動きとDNAの関係を解釈したら良いのか、事例を想定し、その結果、DNAにどのように反映されるのか？試みることにする。
- 新天地に移動する場合と既に人が住む地域に移動する場合2例を想定し、DNAの現れ方を推定してみることにする。

民族移住のモデルとDNA		モデル			
		一般のDNA	女性 mtDNA	男性 Y染色体	
1	人類の住んでいない新天地への移住	○	○	○	○
	人類の住んでいる地域への移住				
2	2a 男だけが移動(侵略)する場合	○	○	○	○
	2b 男女が移住する場合	○	○	○	○

- 各々のDNAのタイプで遺伝子の形態毎に考える。
 - 一般のDNA(これが大多数)
 - ミトコンドリアDNA(母性遺伝のみ=特殊なケース)
 - Y染色体DNA(父性遺伝のみ=特殊なケース)

次にページ以降に図示してみると、3つの異なるタイプのDNAの遺伝・継承の仕方が、大きく異なることが判る。実際の民族移動では、様々なケースが考えられるので、その予習(スタディ)になる。

モデル1-a 新天地への移住

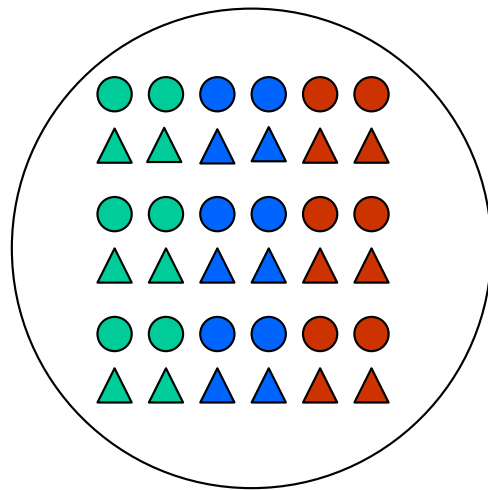


- ● ● の3家族の中から3組の夫婦が移動へ
- 移動したい「移動を好む、適した」● 兄弟とその妹夫婦が新天地AAへ
- 新天地AAで定着し、次世代の家族を増やし、
- その中から「移動を好む、適した」● の3組の夫婦が新天地BBへ移住
これを1-aモデルとする

モデル1-a

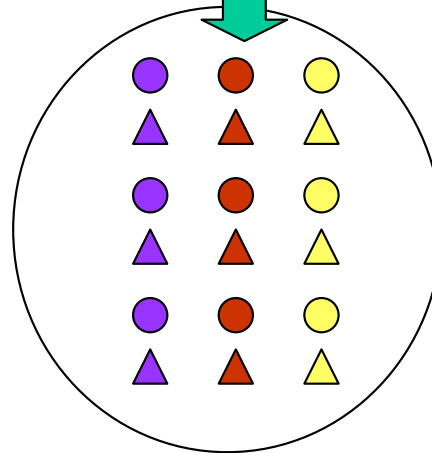
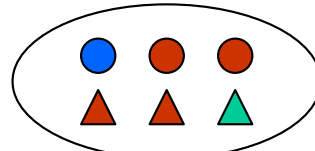
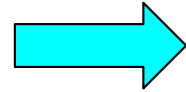
新天地への移住

一般のDNA



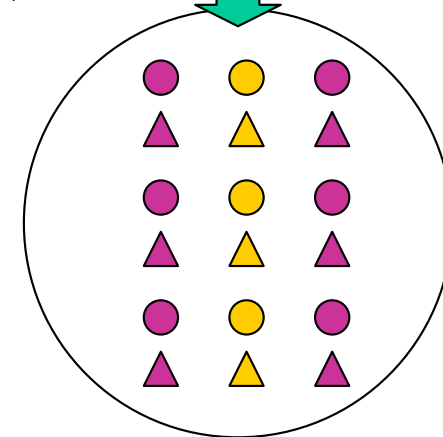
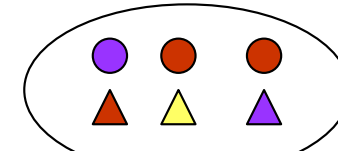
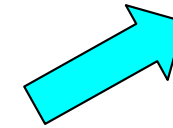
定住地

新天地AAへ



■の比率は4/6

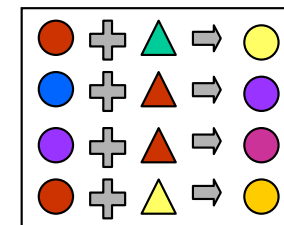
更に次の新天地BBへ



■の比率は4.5/6
■の比率は1/6
■の比率は0.5/6

+++一般のDNAでは男女から均等の比率で遺伝子を受け継ぐ+++

- 新天地への移動の主体となったグループのDNAに偏るが、その他のDNAも残り、移動した集団のDNAの比率に準じた比率で残る。
- 特に母集団が小さく、偏ったDNAの場合には、偏りが固定される。
例: ■のみの家族が、移住した場合には■のDNAが引き継がれる

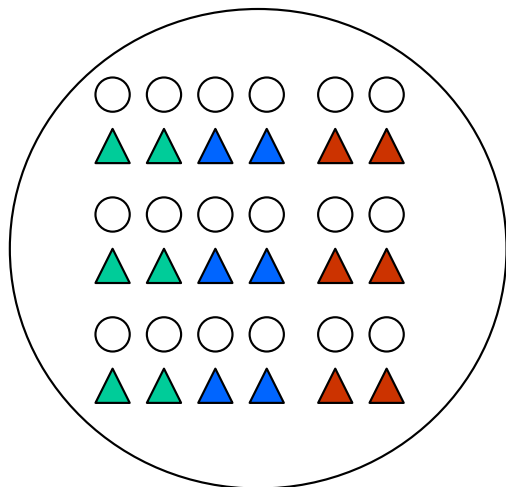


モデル1-a

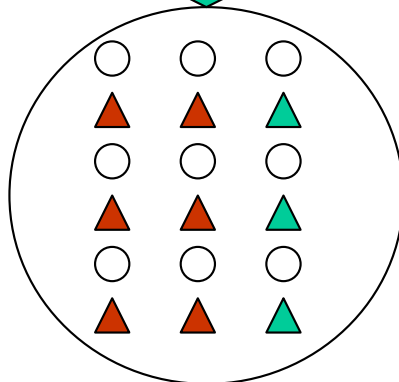
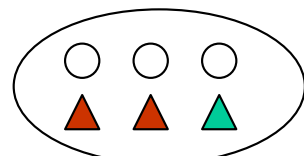
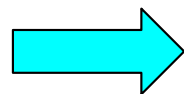
ミトコンドリアDNA

新天地への移住

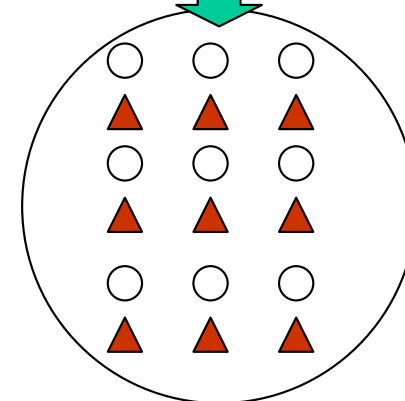
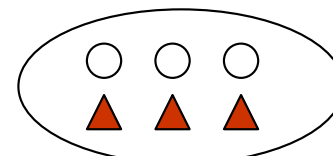
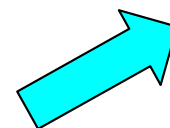
定住地



新天地AAへ



更に次の新天地BBへ

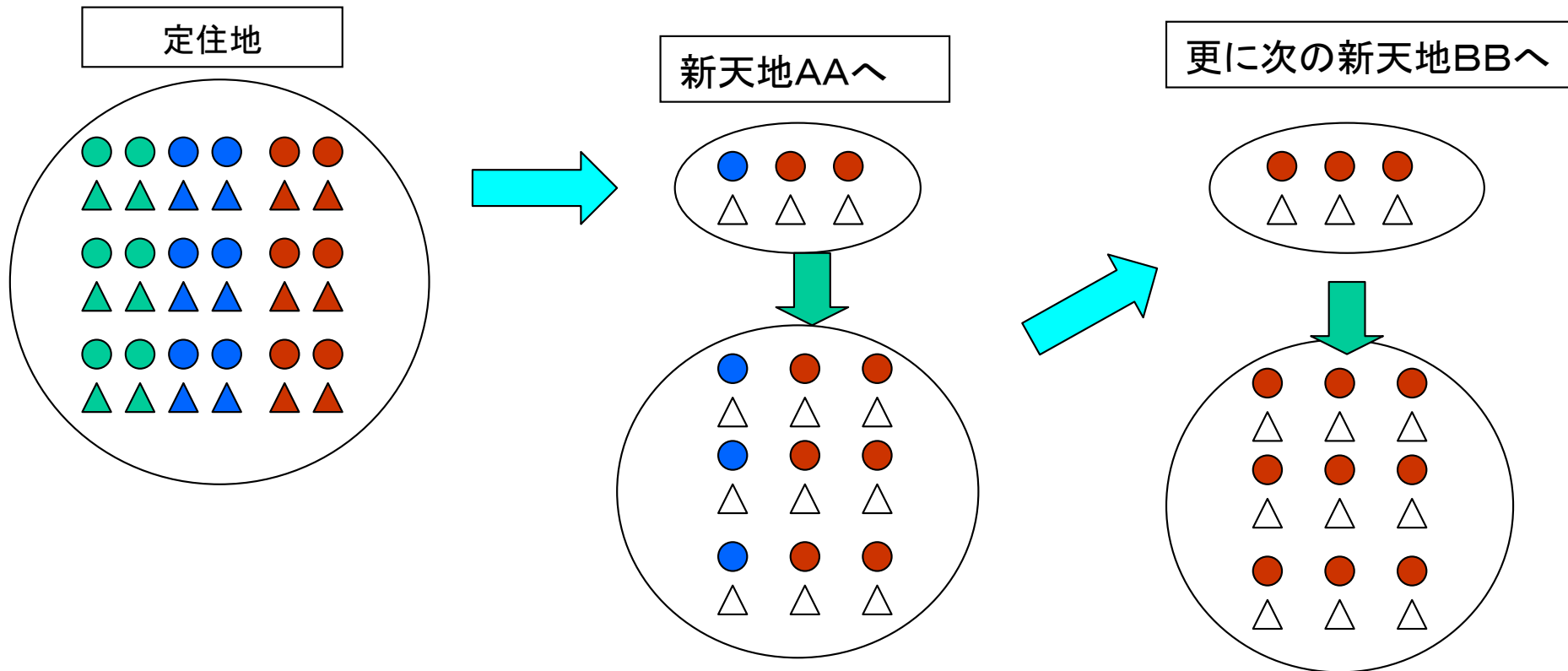


+++ミトコンドリアDNAは女性の遺伝子だけが遺伝する特殊なもの+++

- 新天地AAでは移動したグループの女性のmtDNAが次世代へ引き継がれる
- ■ の女のみが新天地BBへ移動すると、全ての子孫のmtDNAは ■ に
- 新天地へ移動を続けると、移動を好む・適した同一形質のDNAに集中する

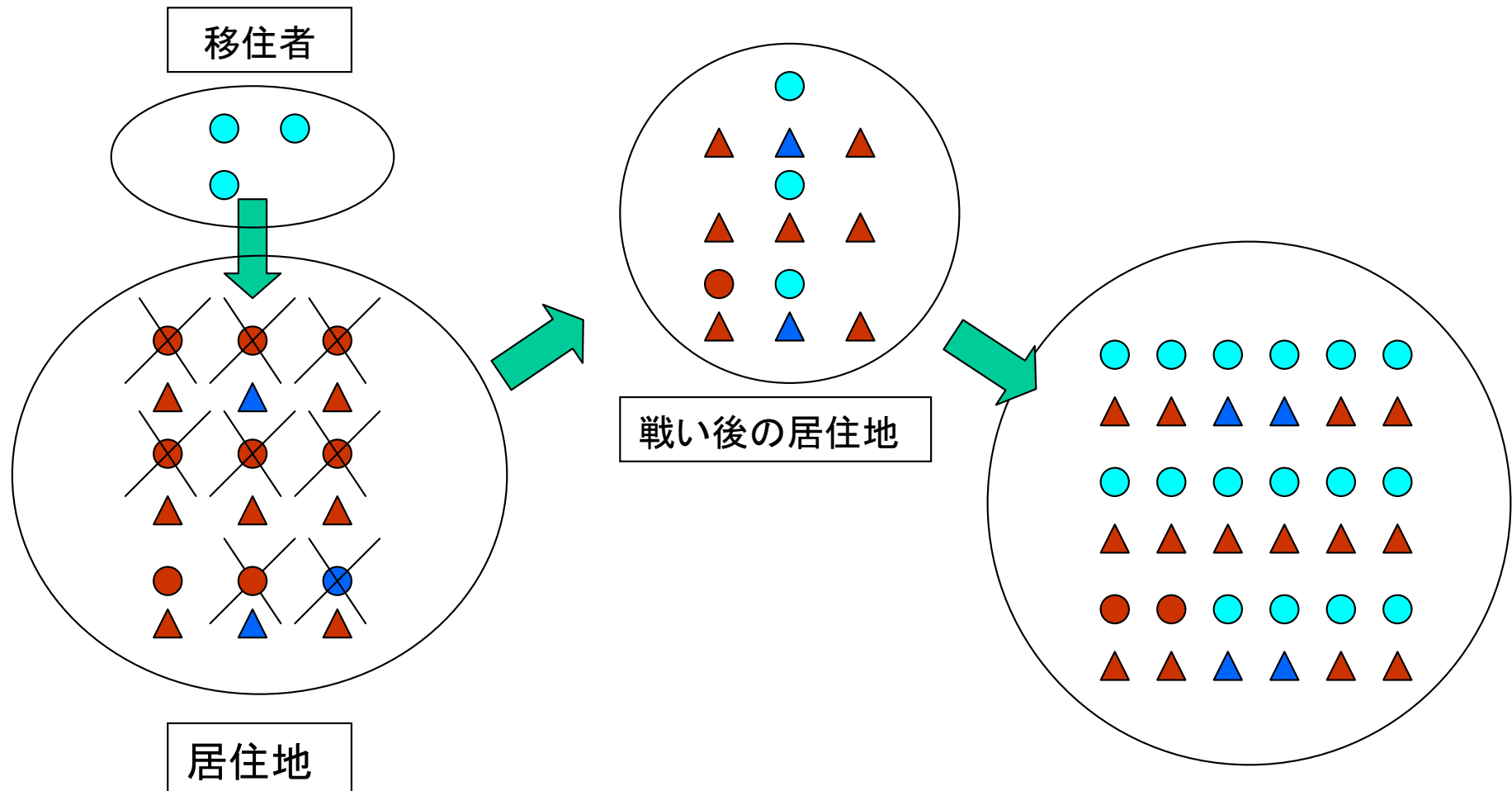
モデル1-a

新天地への移住 男性Y染色体DNA



++男性Y染色体DNAは、男性のDNAのみが次世代の男性へ引き継がれる++

- 移動を「好む・適した」男性のDNAが引き継がれる
- 特定のDNAに集約する傾向になる



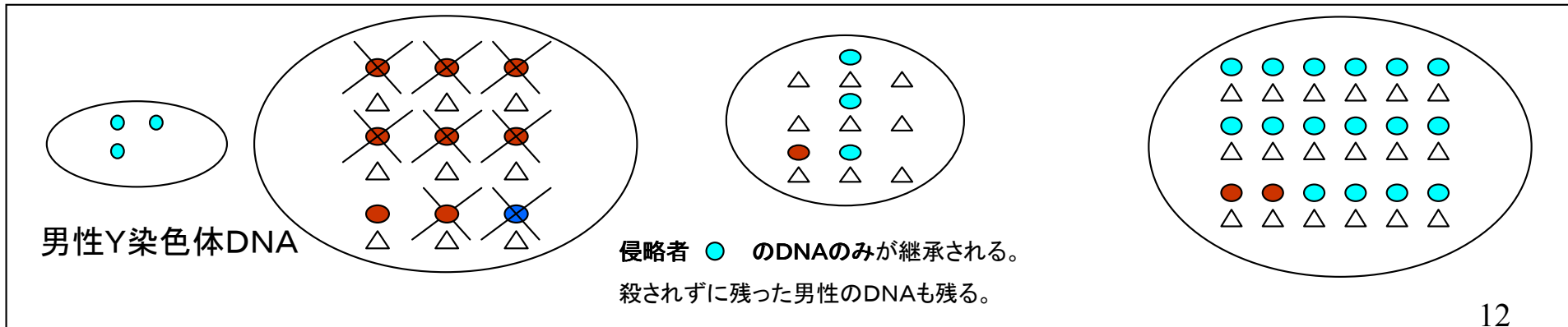
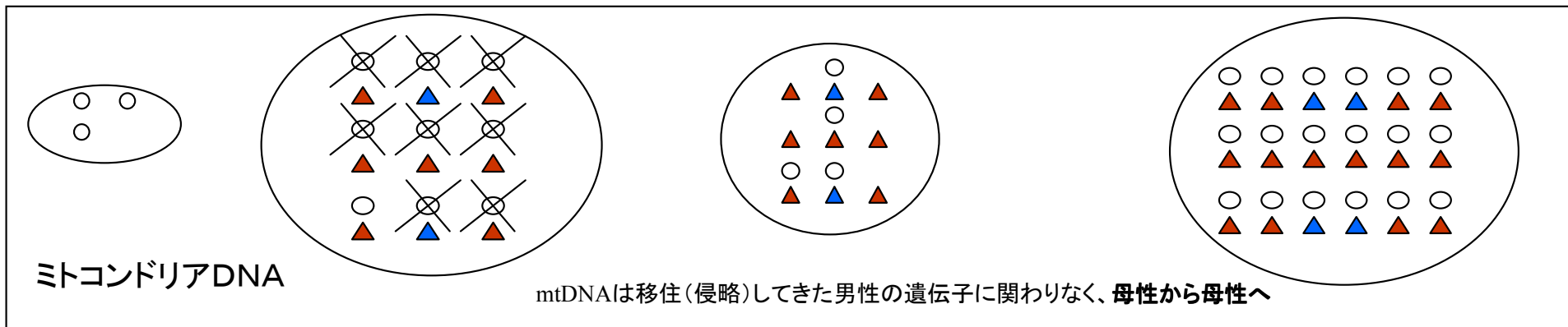
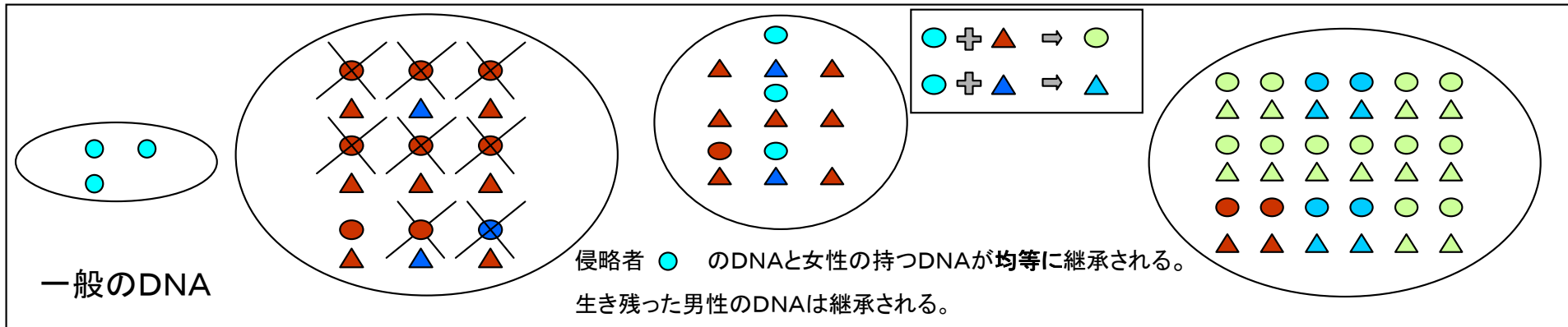
- のDNAを持つ集団が戦争を仕掛け、男を殺し、その地域に移住した場合
- 女性を娶り、人口を増やす
- これを2-aモデルとする

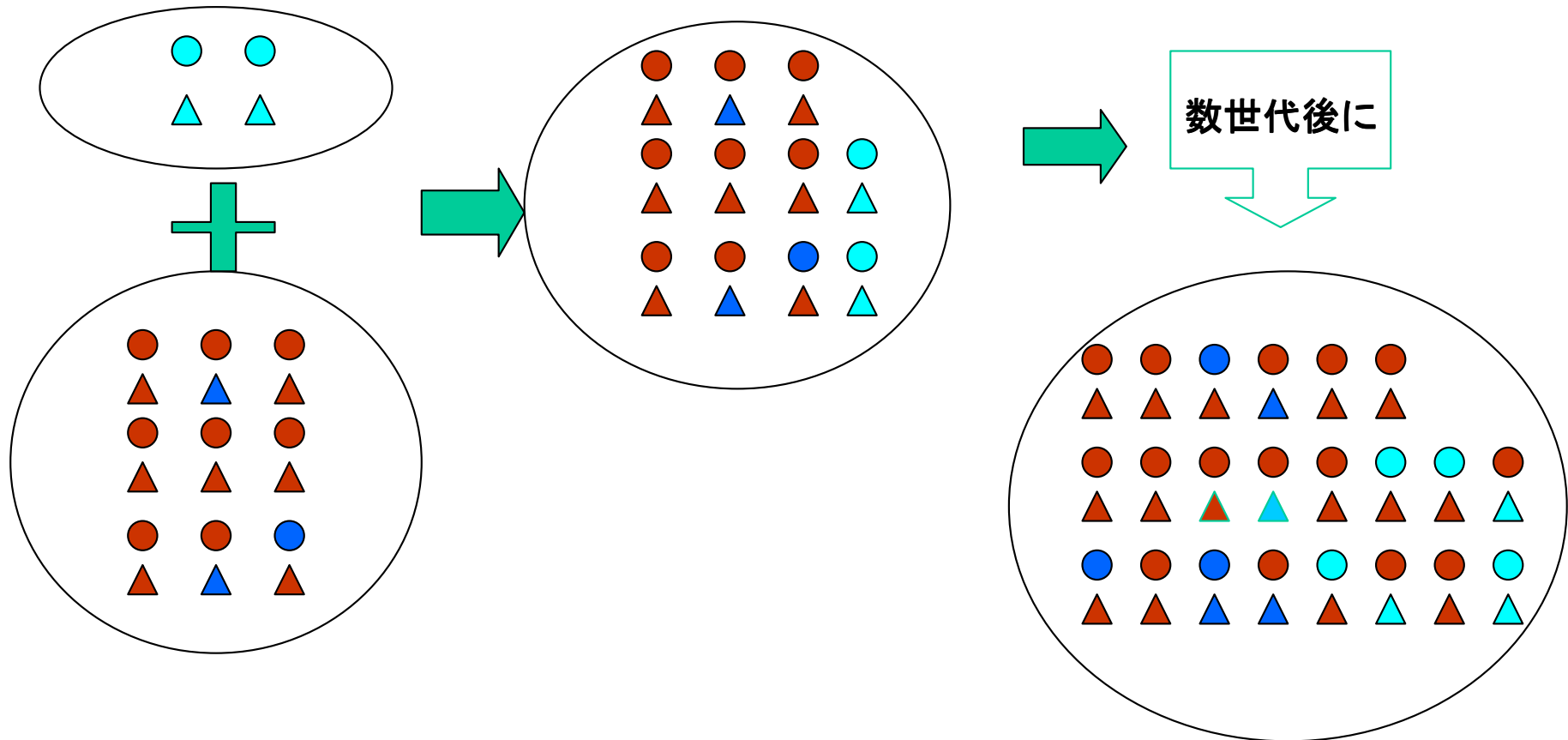
モデル2-a

人の住んでいる地域への移住

男だけが移動

移住者	居住地	戦い後の居住地
-----	-----	---------





- ● のDNAを持つ集団が、その地域に平和に移住した暮らす事が出来た場合
- 次の世代で、混血し、人口を増やす
- これを2-bモデルとする

モデル2-b

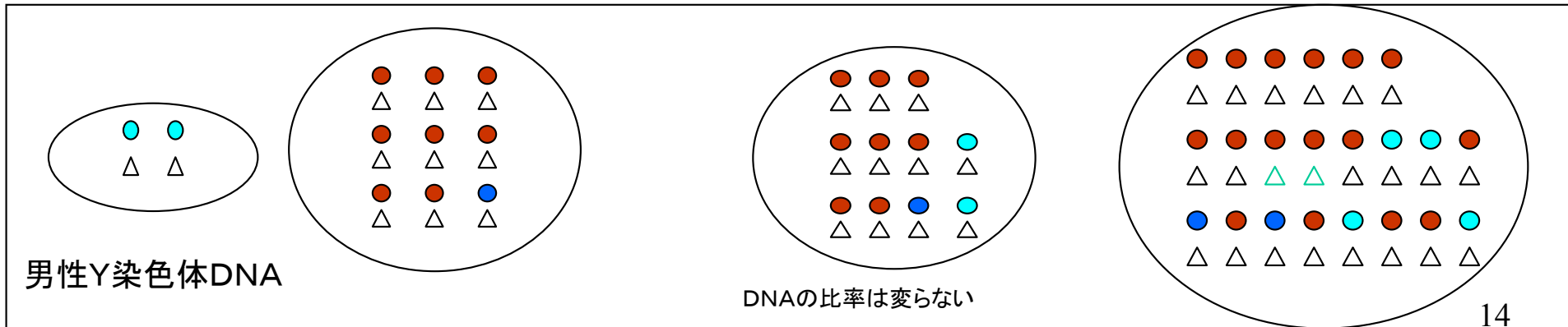
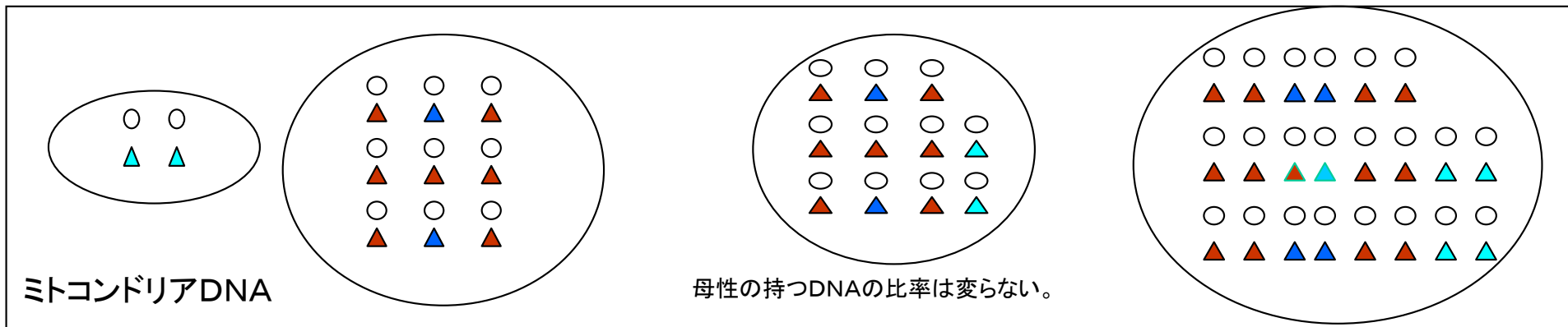
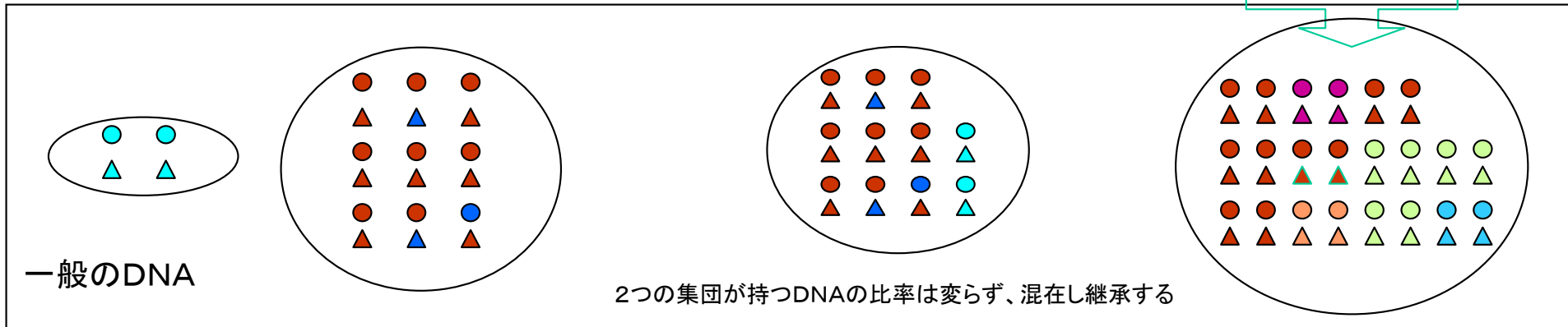
人の住んでいる地域への移住 男女が移住する場合

移住者

居住地

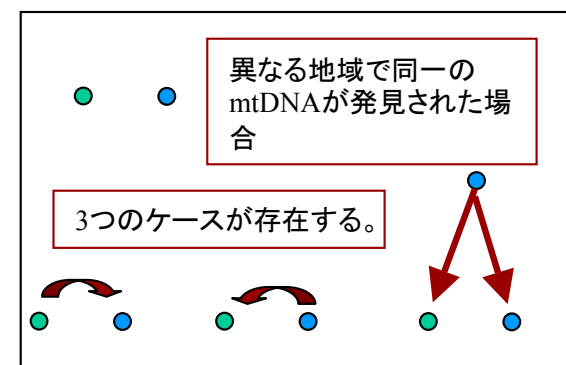
移動後の居住地

数世代後に



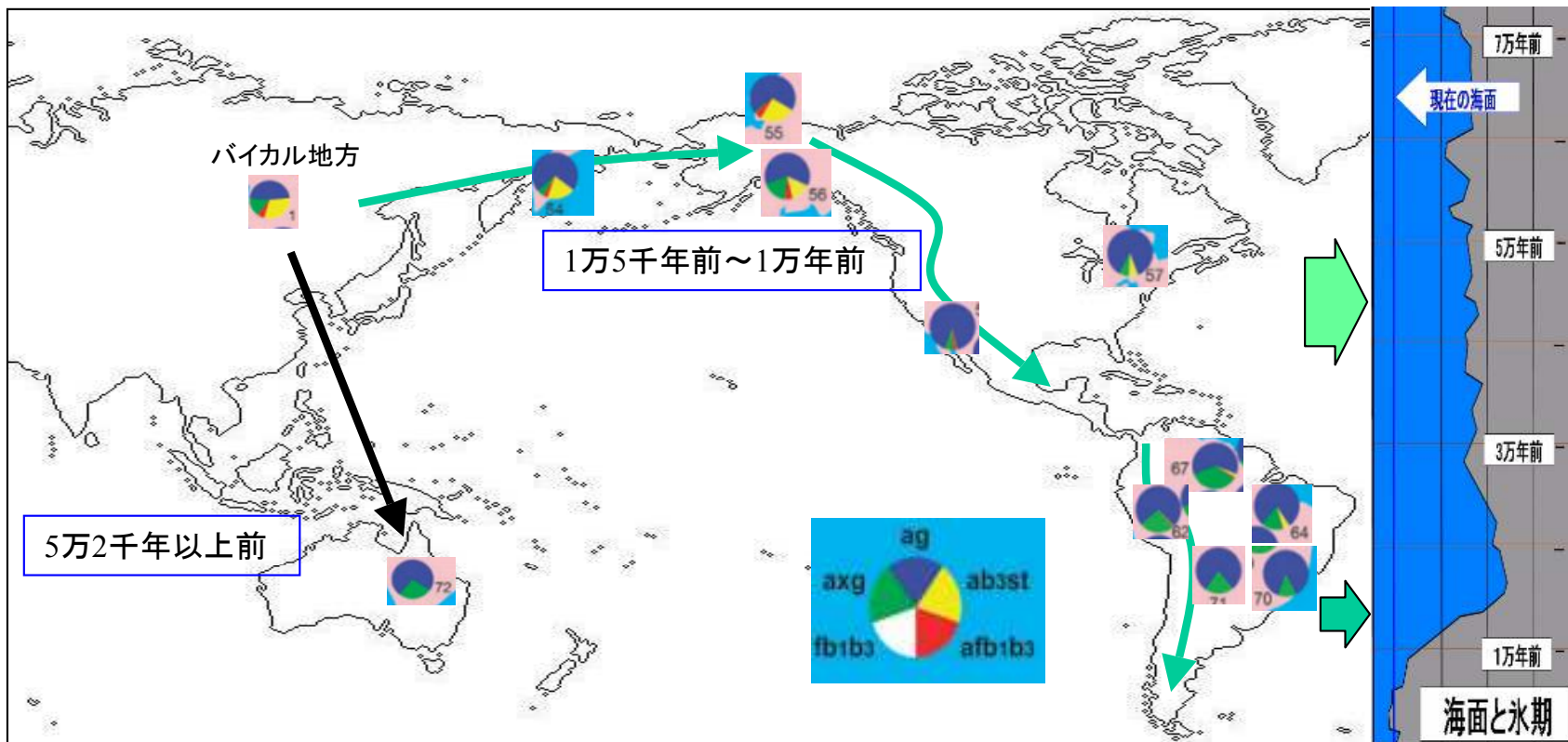
民族移住のモデルとDNA検討から

- 新天地へ移動する場合、
 - (ミトコンドリア)mtDNAは、**特定のDNAに偏る**傾向が見られる。
 - 男性のY染色体、**特定のDNAに偏る**傾向が見られる。
 - 一般の(男女の)DNAは移動集団の持つDNAに偏るが、その比率はそれ以上の変化はない。
- 侵略・戦争を伴う男性群の移動と移住が起きた場合には、
 - mtDNAは、**この移動には影響を受けない**。
 - Y染色体は、**侵略男性のDNAに偏る**。
 - 一般のDNAは侵略者と住民の両方のDNAを継承する。
- 侵略や戦争を伴わない男女の移住は
 - mtDNAも 均等に継承される。
 - Y染色体も、 均等に継承される。
 - 一般のDNAも 均等に継承される。
- コメント
 - 一般のDNAと、(ミトコンドリア)mtDNA、男性のY染色体のDNAの現れ方には大きな違いがある。
 - ケース毎に、現れ方を考え解釈する必要があることが判る。
 - DNAの均一性の高い地域が、集団の移動元であるとしている松本氏の論拠とは、合致していない。
- DNA遺伝子の解析から、実際の民族の起源を推定する場合に留意したいこと。
 - 移住のモデルでは、ある過渡期の状況しか反映していない。移住した後に、戦乱があり、交易が進み混血が進む事態が、長い歴史の中では発生する。それらの全てが反映され現代に残ったDNAから民族の起源を探るためには、歴史上の民族の変遷を加味し、その推論の結果起こりうるDNAの分布と現状の分布が一致するか、吟味する必要がある。民族の歴史の中で、外の民族との交流を極端に避けた場合と、交流を促進した場合では、結果は大きく異なる。間雲に統計的手法で説明してもあまり意味が無いことが多いのでは？
 - ミトコンドリアDNAはその中で、やや異質の断定的な結論を導けるせいしつを持つ。同一の(ミトコンドリア)mtDNAが離れた場所で見つかった場合は、共通の母系祖先がいることを証明できる、その結果を誰しもが認める事になる。しかし、一致した事を持って、一方から他方へといった流れを示している事ではなく、その逆も有りうるし、全く別の所から、その二箇所へ移動してきたことも有りうる。一致した事と、移住の流れは別ものであることを理解して取り扱いたいもの。間違った取り扱いがされることが多く見られるため、注意を喚起しておきたい。



松本論文への疑問

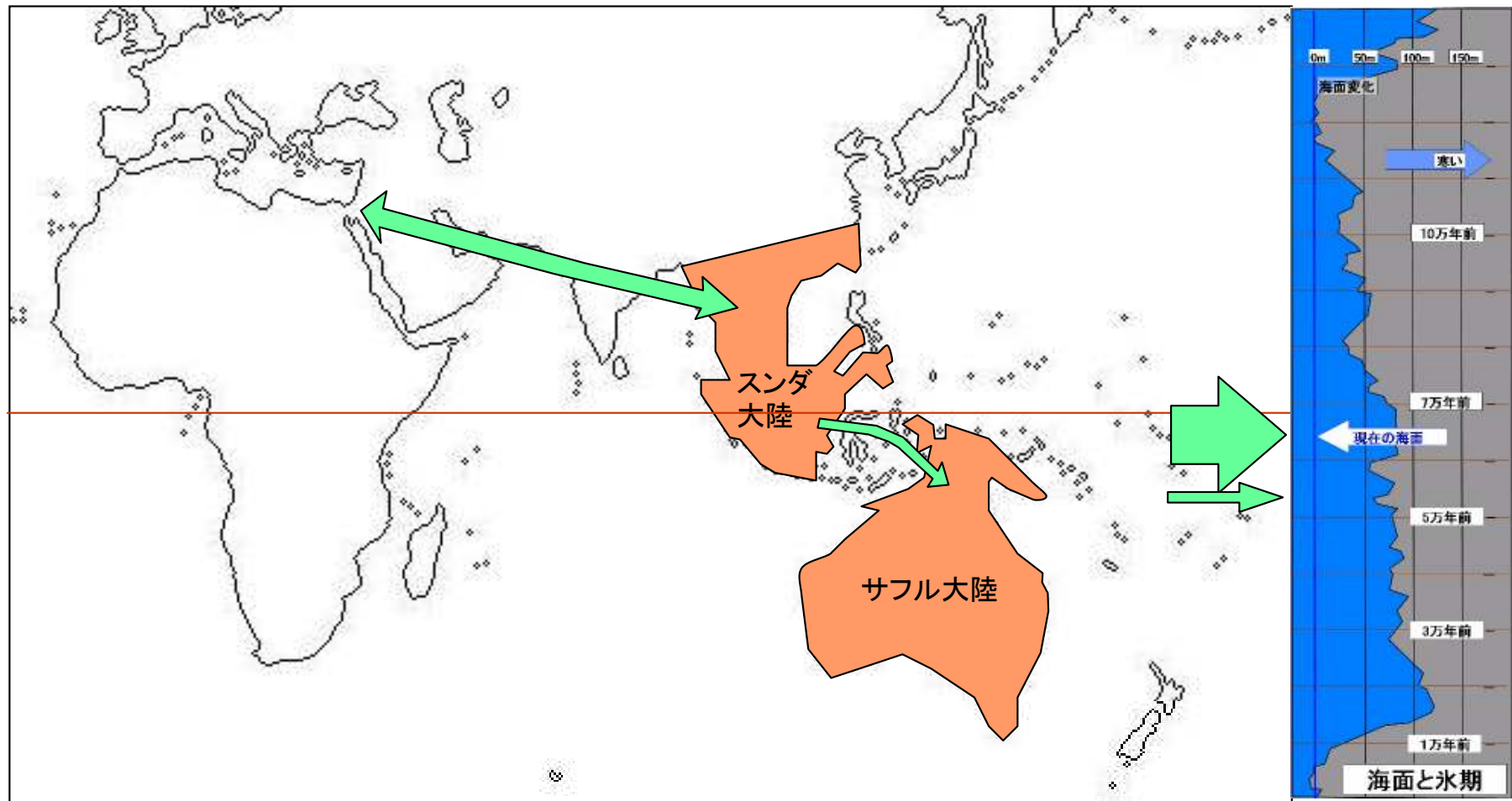
- 南北アメリカのインディアンは、北方型のモンゴロイドが、シベリアからベーリング海峡を渡ったもの。
- 同一の遺伝子Gmデータを持つオーストラリアのアボリジニも同様に北方型＝バイカル地方起源 とされている。
- アボリジニは、その遺跡の年代から示される5万2千年前に、モンゴロイドが、スンダ大陸・インドネシアの島から、オーストラリアに渡ったことが、別の資料で、論証されている。
- 5万2千年より前に、北方型・バイカル地方起源のモンゴロイドが南下し、赤道を越える ルートを通り、オーストラリアに渡れたのだろうか？
- まず、この点について疑問を投げかける。



試論 : モンゴロイドの移動ルート

- 移動ルートを考えるに際して
 - モンゴロイドの特徴として、手足の短いずんぐりとした体形とのっぺりした顔立ち、体毛の薄いこと、これらの形質が上げられるいる。この形質は、極めて寒冷な気候で生き延びるために、数千年・数万年の世代を重ねて取得したものといわれている。
 - 南方にいるモンゴロイド上記のような形質は持っていないが、その理由は、かれらは過酷な寒冷地への適応の機会が無かったからと考えられる。
 - この理解から類推すると、南方系の目鼻立ちのはっきりした原始モンゴロイドが、何らかの理由でで北方に移住し、気候の変化に遭遇し、極寒の気候に直面、その厳しい生活に耐える技術と道具を持ち、食料を確保して生き延びる事ができた。その代償として、ずんぐり、のっぺりの体形・形質を取得した。
 - 北上中に途中で留まった場合、極寒の気候に会わなければ、南方系の形質・容貌を保つ事になる。
 - 北方対応したモンゴロイドは、極寒の地で得た技術・道具を持ち、温暖化に伴い南方へ移動するマンモスを追って南下し、その後温暖な地でも、極寒の気候に対応した体形で生活を続けるようになった。
- モンゴロイドの発祥と移動のルート---試論のルート
 - 生存に良好な地で発生したモンゴロイドが、北方に移動したところで、思いがけず極寒の気候に出会い、その環境に耐えるための技術を獲得し、同時に耐寒性の体形を獲得した。その後、気候の温暖化に伴い、四方に広がり、アメリカ大陸では南端まで達し、アジアの南の地域では、長江の中流域で稲作技術を生み出し、人口を爆発的に増大させた。遅れてきた南方型のモンゴロイドと遭遇し、長江の下流から中国全土へ。長江上流の雲南から南下し、インド大陸へ、又、帆船の技術を獲得して、太平洋全域にまで広がった。
- DNAの解析から、このようなモンゴロイドの動きをトレース出来るのではないだろうか？
- このモンゴロイドの発祥と移動ルート及び日本人の起源について示し、この松本論文のデータと地図が、その流れをトレース出来るか、試みる。ミトコンドリアDNAの情報も、このトレースと矛盾しないか？また、証拠となるのか確認する。

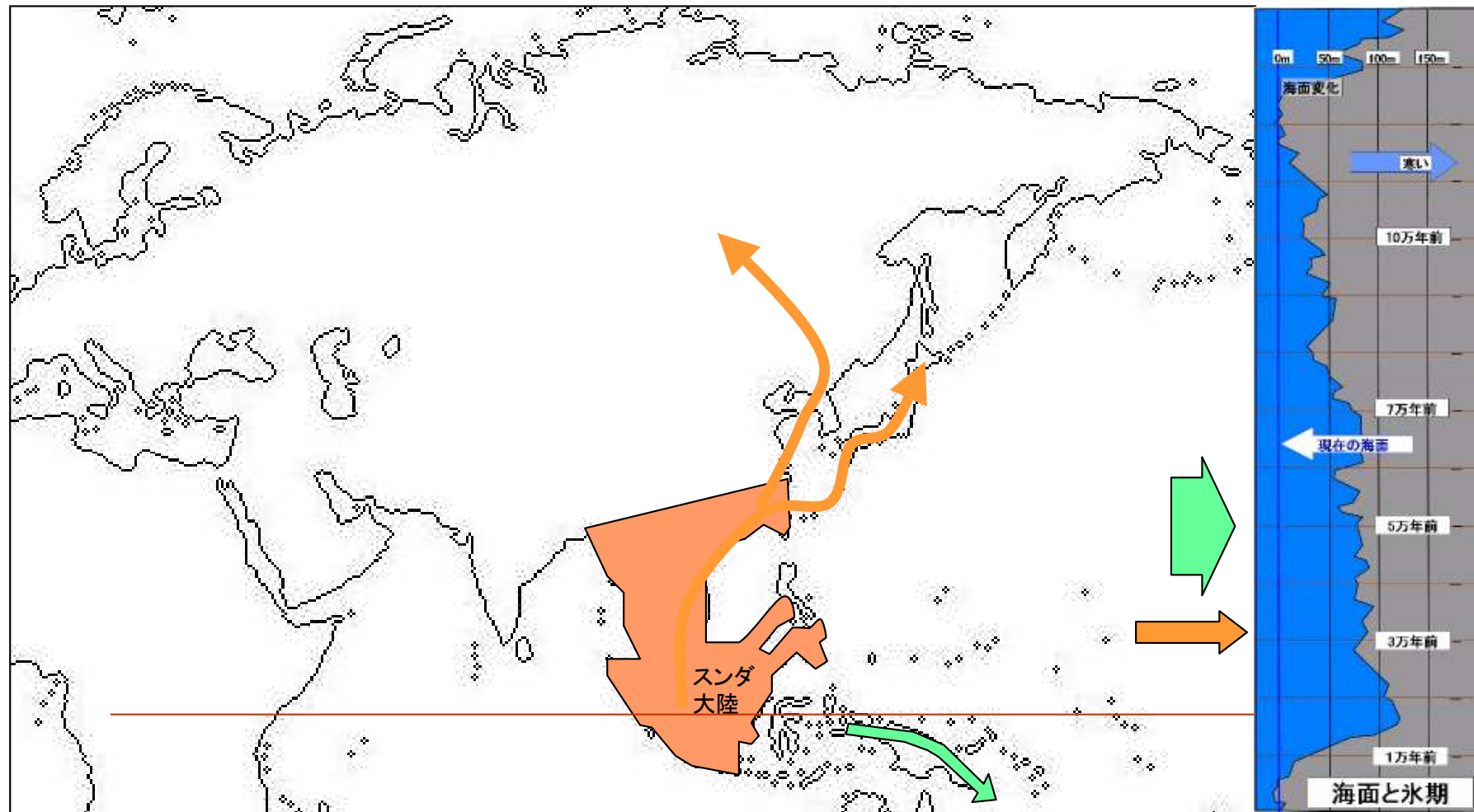
モンゴロイド・スンダ大陸で発祥



- モンゴロイドの祖先は、アフリカを出て、南回廊を通り、スンダ大陸へ移動。最終氷期(8-1万年前)には海面が下がり、南アジアにジャワ島、ボルネオ島を含むスンダ大陸があった。
- スンダ大陸への人類の流入は、一回限りではなく、複数回あった。
- 熱帯雨林のスンダ大陸に移った人類は、モンゴロイドの形質を備えた。スンダ大陸はモンゴロイドのゆりかご。
- 判明している遺跡の年代から、5万2千年前以前に、モンゴロイドは、サフル大陸に移住し、ニューギニア島とオーストラリア大陸に、遺跡と子孫(アボリジニ)を残している。

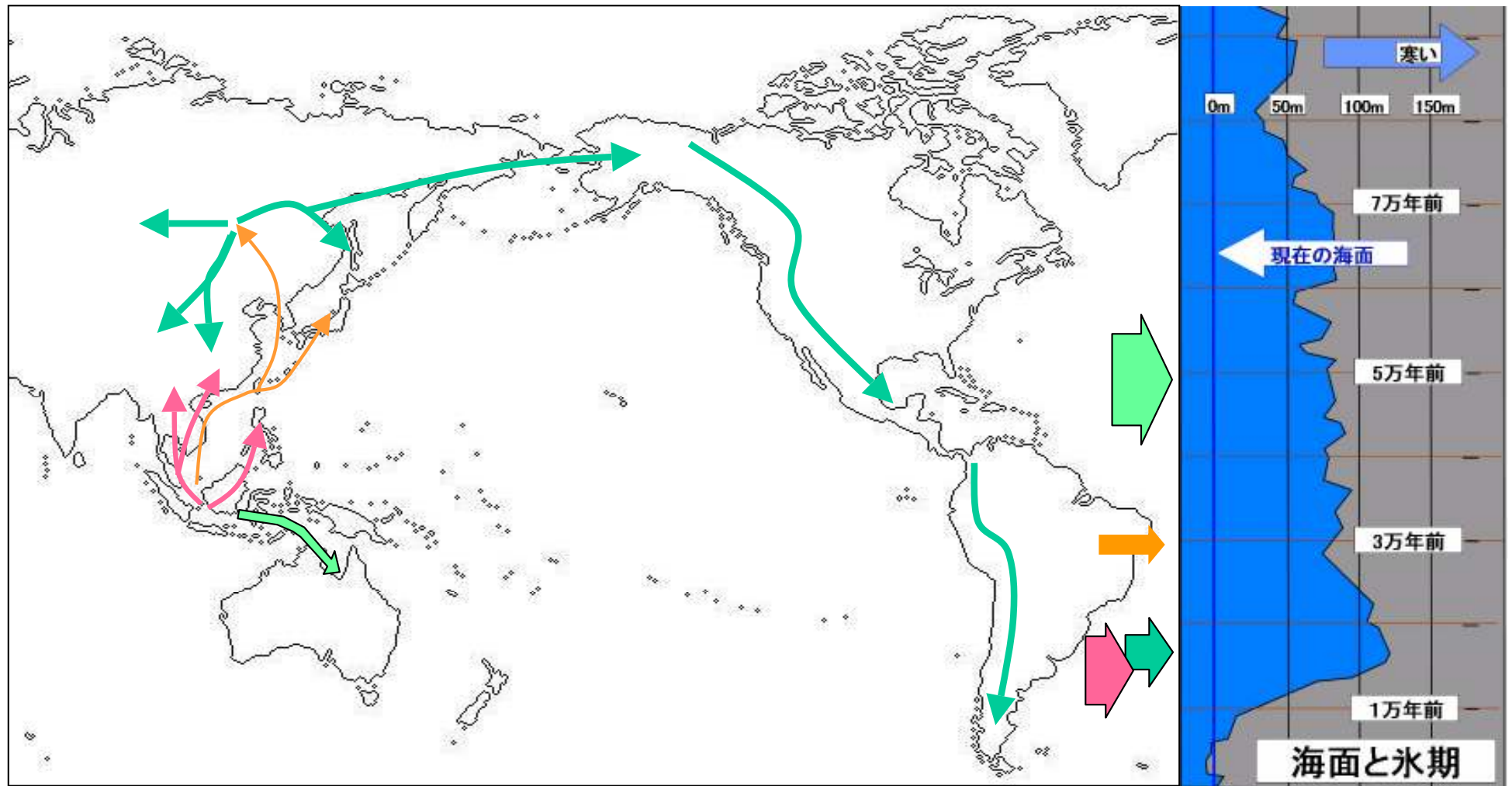
<#>

スンダ大陸から北へ



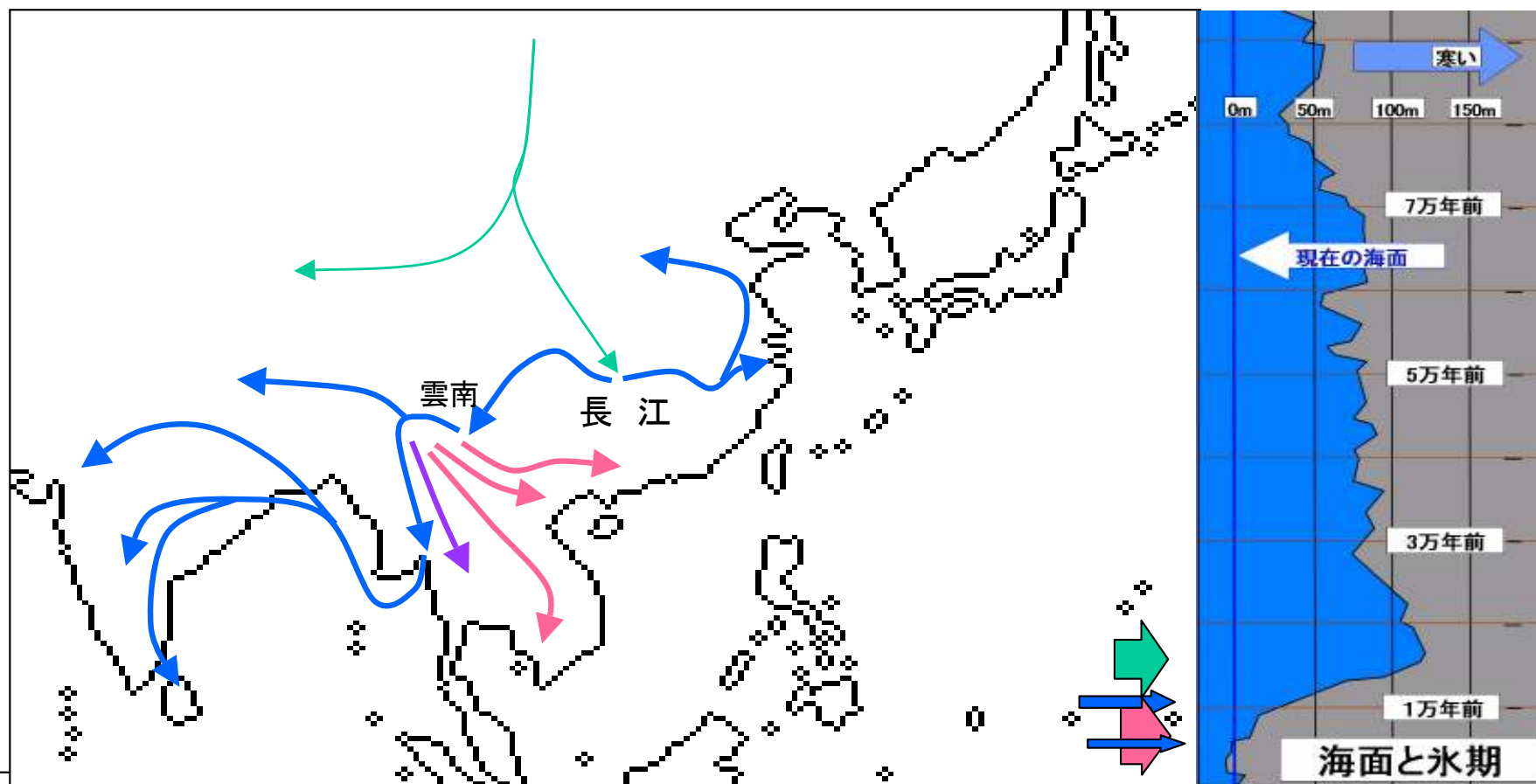
- 一時的にやや温暖化した3万年前に、モンゴロイドは、海岸線に沿って北上。居住可能な地域に一部の人を残し、更に北上を続け、大陸中央のバイカル地方まで達した。
- 琉球・九州・四国・本土・北海道に、途中残留組の子孫が残った。
- 再び寒冷化し、最も厳しい氷期を、生き延びることが出来たモンゴロイドは、体形・形質が寒冷化対応、優れた狩猟用石器や耐寒衣料を手にした。生き延びる事ができた地域は、バイカル湖のある地で、比較的暖かい気候の恩恵を受けた。その他の寒冷地域では、死に絶えてしまったものと想像する。海岸に近く、比較的温暖な、日本では生き延びすことができ、縄文人に繋がった。韓国南部なども同様の事が起きたと思われる。

バイカル地方から東西南北へ



- 温暖化の始まった18,000年～15,000年前に、寒冷地仕様の体形になった北方型モンゴロイドは、優れた道具と技術を持って、食料となる大型動物を追って。四方へ移動開始
 - 北方型モンゴロイドの中で、東へ向かった一族は、サハリンから北海道へ。
 - 北へ向かったモンゴロイドは、15,000年～10,000年前、ベーリング海峡を越えアメリカ大陸へ。南下を続け、南米の最南端まで達した。
 - 南へ向かったモンゴロイドは、揚子江(長江)流域へ。
- モンゴロイドの発祥の地＝スンダ大陸では、引き続き西方からの流入もあり、新しい南方型モンゴロイドが主流となる。〈#〉
 - 温暖化に伴い、再び北上開始。東南アジアの河川沿いにも北上し、多くの河川の源流となっている雲南の地へ移住。

10000-5000年前 長江から東南アジア・インドへ

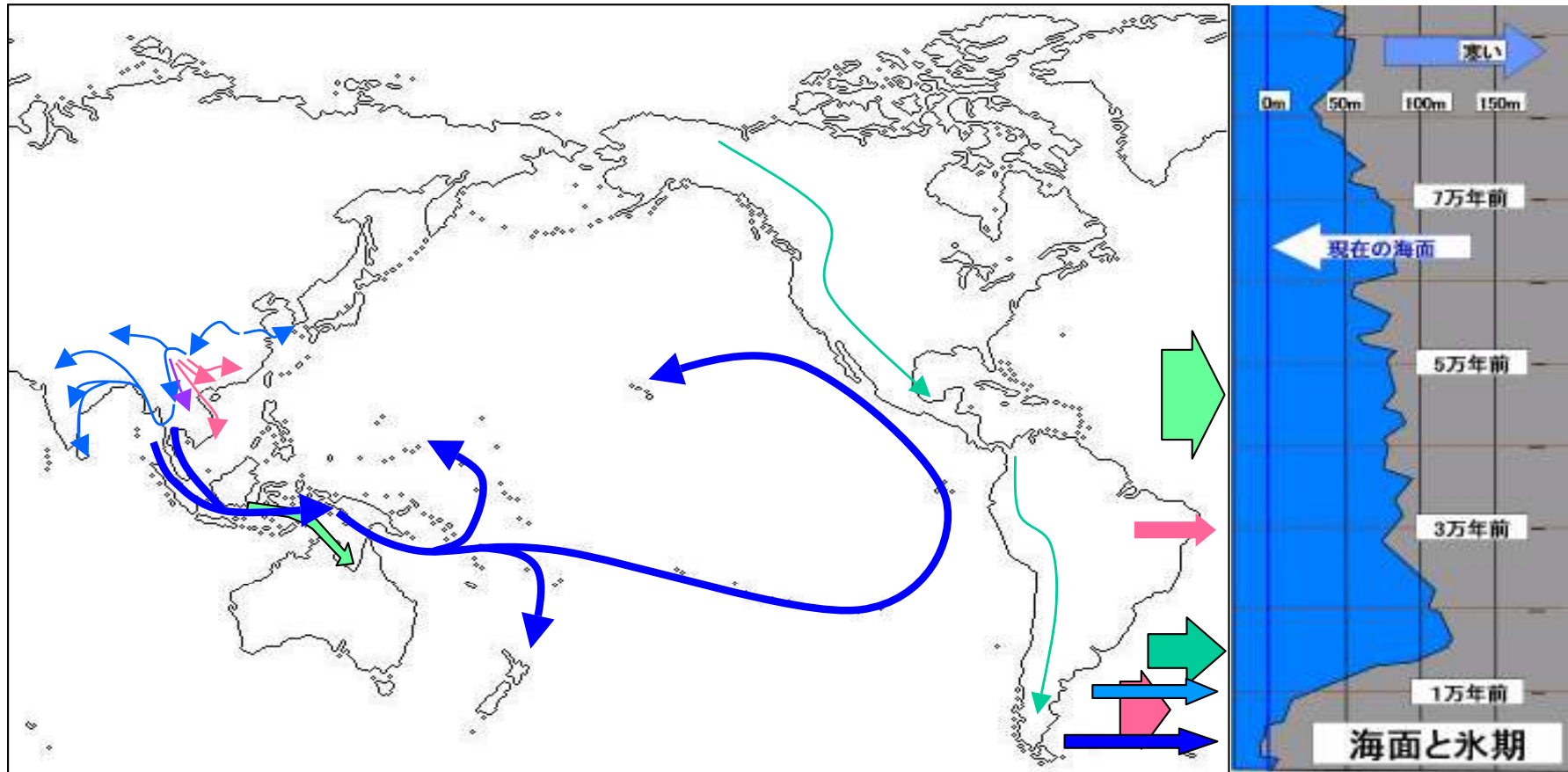


- 長江中流へ移住した北方型モンゴロイドが、稲作耕作と帆船の技術を確認し、人口を増やし、上流、下流へ拡散移住を行う。
 - 下流へ： 海岸沿いに北上していた南方型モンゴロイドに遭遇し、稲作技術が伝播される。海沿いに北上し、山東半島から現黄河流域へ広がる。
 - 一方、長江上流へ向かった北方型部族は四川省、雲南へ。雲南に北上していた南方型モンゴロイドに稲作技術が伝播。
 - 北方型モンゴロイドは、雲南から怒河沿いに南下しビルマ・ミャンマーへ。
 - 一部は、メナム河の流域に入りタイへ
 - 一部は、海岸沿いに西北へ上がり、インド大陸へ。
 - 西は現パキスタンのインダス文明へ起した。(インダス文明は稲作の文明と判明)。
 - インド南部からセイロン島へタミル文化を築く
 - 稲作技術を持った南方型モンゴロイドが、
 - ランツェン河・メコン河を南下しカンボジア・南ベトナムへ
 - ホン河を下り、北ベトナムへ
 - 紅水河を下り、中国南部(広西チワン族自治区)へ

稲作・米食がはじまると、それ以前の疎らな人口とは比較にならない、極端に大きな人口密度となる。

稲作技術は、それを開発した民族が享受したが、隣接し居住した外の民族にも伝達されたものと推察される。

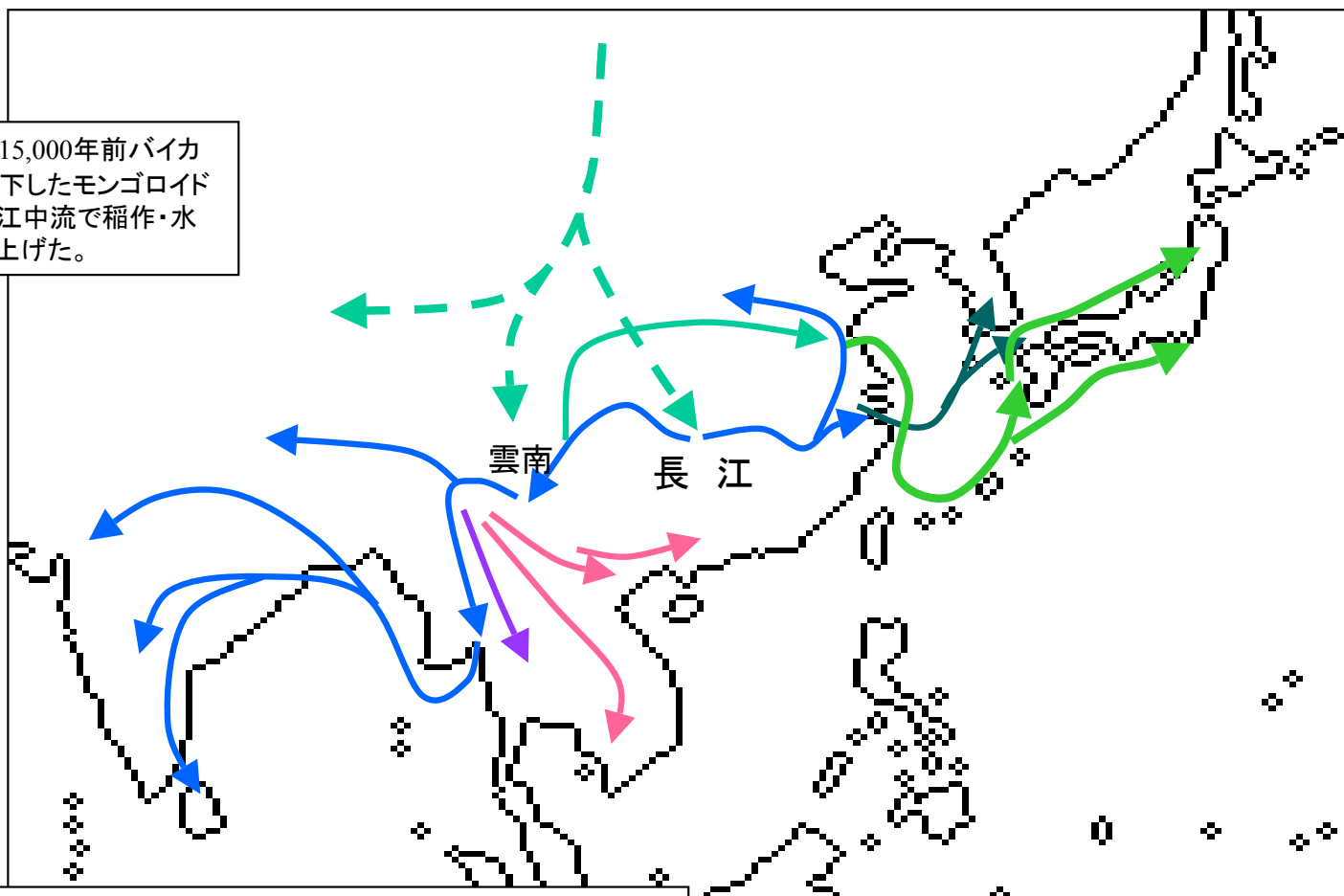
5000-3000年前



- 北方型モンゴロイドは、長江流域で稲作技術と共に、優秀な帆船・ジャンクを開発、インドでは、海のラクダと云われる帆船・ダウを開発。
 - カヌー・カタマラン(双胴船)はタミル語(タミル人:日本人と同じ言葉と文化を持つインドへ移住したモンゴロイド)
- 雲南地方を南下し、海洋に出た北方型のモンゴロイドと遭遇した南方型モンゴロイドは、帆船技術を持つ至った。
- 帆船を持ったモンゴロイドは、約3,600年前に、東へ。ニューギニアの北東アドミラルティー諸島から、フィジー、
 - 海の民へ体格を変えながら、トンガ、サモアのメラネシア・ポリネシアへ拡散。、ハワイなど太平洋全域に、居住地を広げた。
 - 一部は南米へ上陸

7000-2300年前 長江からインドへ、日本へ

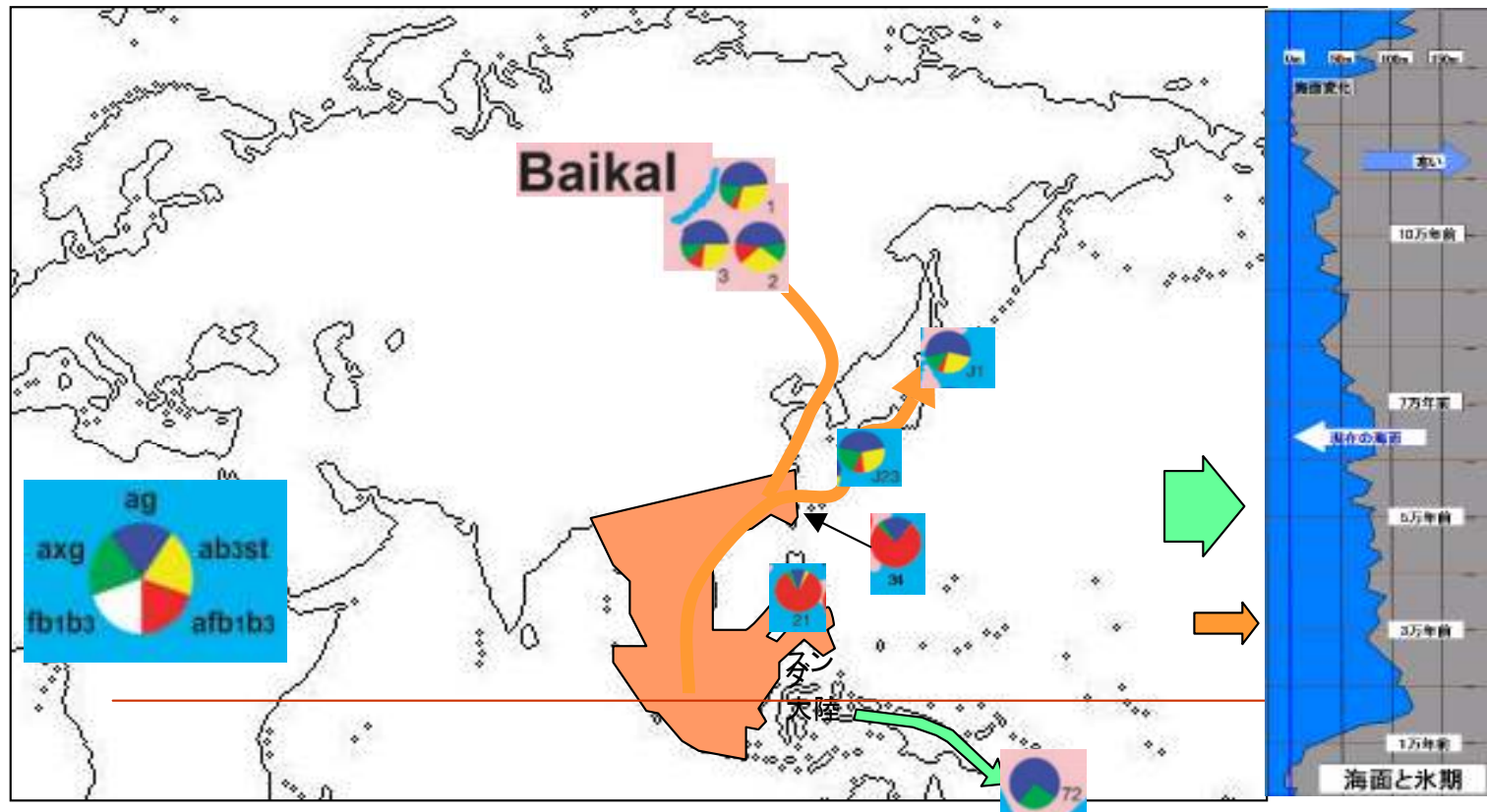
• 18,000年～15,000年前バイカル周辺から南下したモンゴロイドの一族が、長江中流で稲作・水田技術を作ら上げた。




- 稲作技術を持ったモンゴロイドの一部が、下流へ移住した民族は、長江の北、淮河の流域の徐州などに広がった。
- 上流の四川・雲南へ、そして、雲南から山を越え、川沿いに南下し、ビルマへ。更に西方のインドへ移動。稲作農業をベースに人口を増やし、インダス文明を構築。2600年前(インダス文明期の栽培作物とその消長に関する調査研究:信州大学、俣野 敏子)
- 西方から来たコーカソイド(白人)の侵略を受ける。(インド人のミトコンドリアDNAはモンゴロイドを示す)
- 南インドへ渡ったモンゴロイドは、BC3000-BC2000にタミル文化を築く。

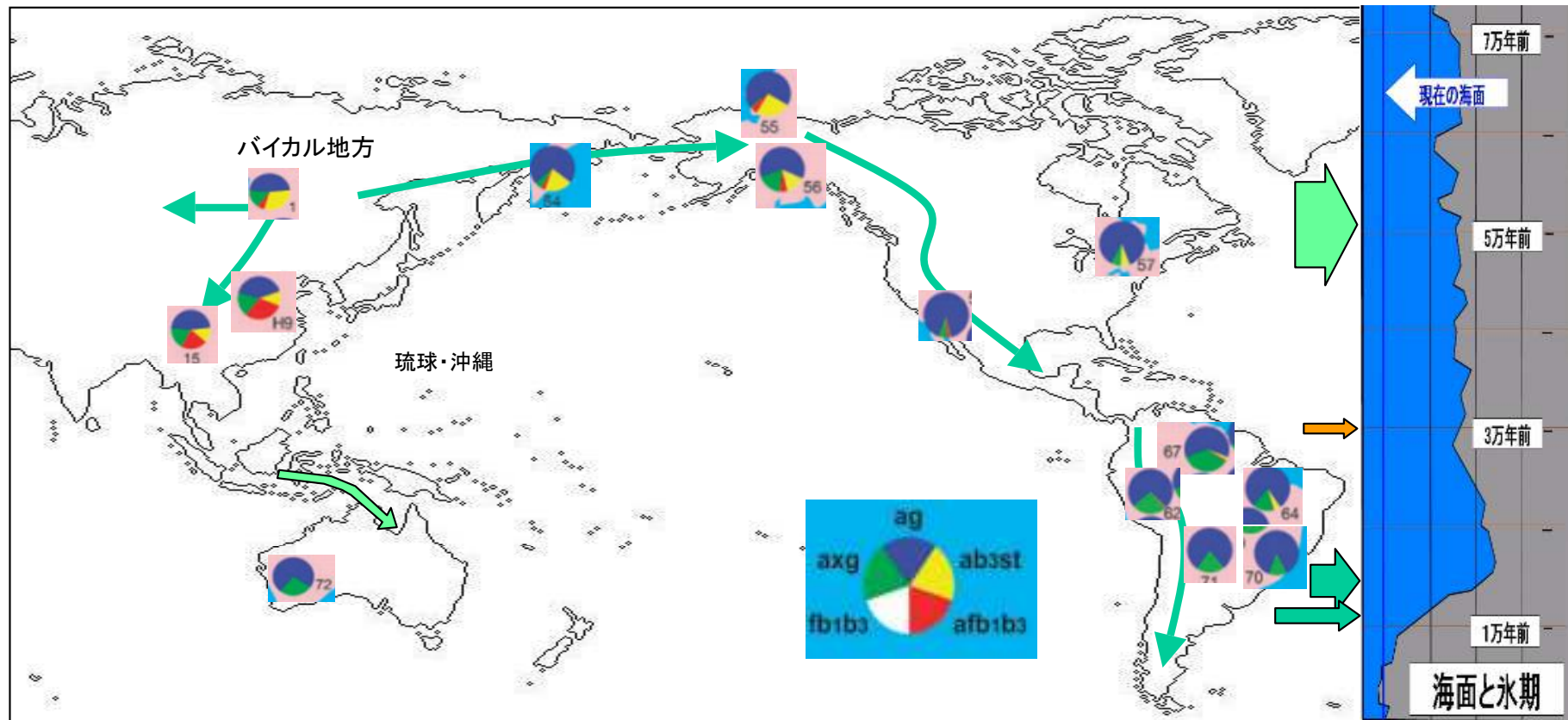
- BC1000年頃、殷から周への移行期に、徐夷と呼ばれた民族の一部は、戦火を逃れて、中国東北部や、韓国南部や九州北部逃れた。
- BC482年頃、春秋の戦乱の中で、呉の末裔が韓国と九州北部へ
- BC219年、秦の時代に、徐福の一行(3000人の子供を含む、数万人が、韓国南部と日本各地へ。稲作と鉄を含む金属技術を持って、日本中に一気に広がり、弥生時代を築いた。
- 徐福一行は、徐州の倭人と、秦の軍隊に属していた四川・雲南の倭人の一族で構成された。その中には、秦の軍隊にいたコーカソイド(白人)も混血し入っていたと考えられる。

現代に残る遺伝子で、モンゴロイドの移動ルートをトレースする ①



- 5万年前、初期のモンゴロイドは、 のag, axgの2つの遺伝子を持っていた。その時代に移住し、孤立したアポリジニは、その遺伝子を保持した。
- その後スンダ大陸では、新しい流入があり、遺伝子のab3stとafb1b3が加わり、混血がやや進んでいた。
- 3万年前の北上開始時には、沖縄とアイヌの比率に近い遺伝子の比率であった。(沖縄・アイヌは孤立し、古い比率が残る)
- バイカル地方へ到達した人達の遺伝子は、途中の沖縄・アイヌと近い比率を保って、新天地に到着したことになる。
- (フィリピンも、同時期には同じ比率であったが、後に圧倒的に増えているafb1b3主体のモンゴロイドの流入で現在の比率になったと推定される。ag,axg, ab3stの遺伝子を残している。)
- 台湾の高砂族は afb1b3主体の南方型モンゴロイドで、後に流入した民族。台湾には、3万年前の北上した子孫は残らなかったと推定。

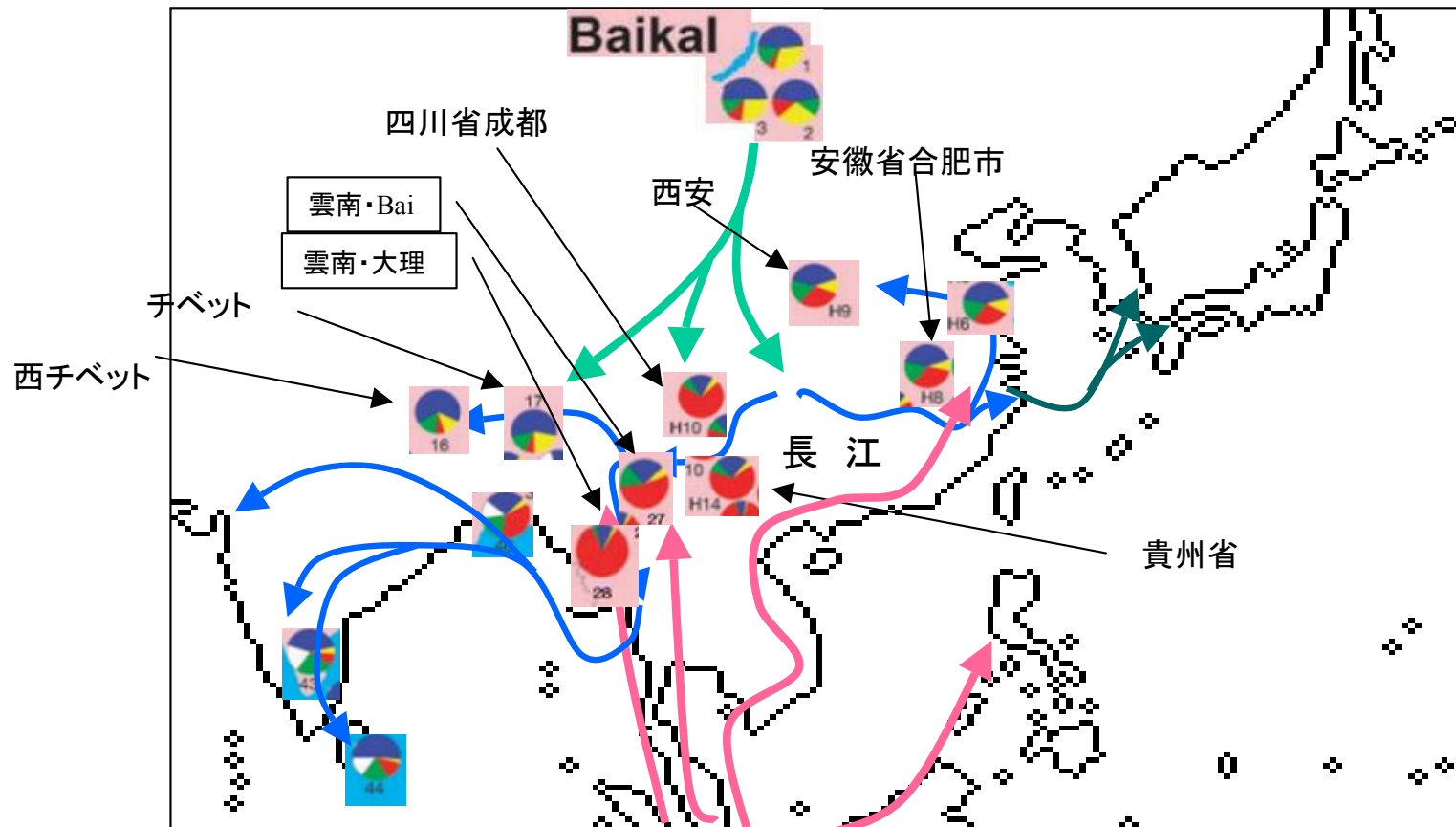
現代に残る遺伝子で、モンゴロイドの移動ルートをトレースする ②



- バイカル地方で、極寒冷期を生き延びたモンゴロイドが北方型モンゴロイドとなり、遺伝子の原型になる。
- 東北へ進み、ベーリング海峡を渡ったモンゴロイドの家族数は少なかったと推定。従って、バイカルの比率とはやや違う、偏った比率になった。
- 更に、北米を南下した家族数は少なく、偏りが進む傾向にある。
- 南下したチベット15、西安H9では、後に南から来たafb1b3主体のモンゴロイドとの混血の結果、afb1b3の比がやや多いが、バイカルの比率を保っている。
- 西安の遺伝子は、幾たびかあった中国の統一と戦国の時期を経過して、多くの部族・民族が混血した結果、新南方系のafb1b3の血が増えている。

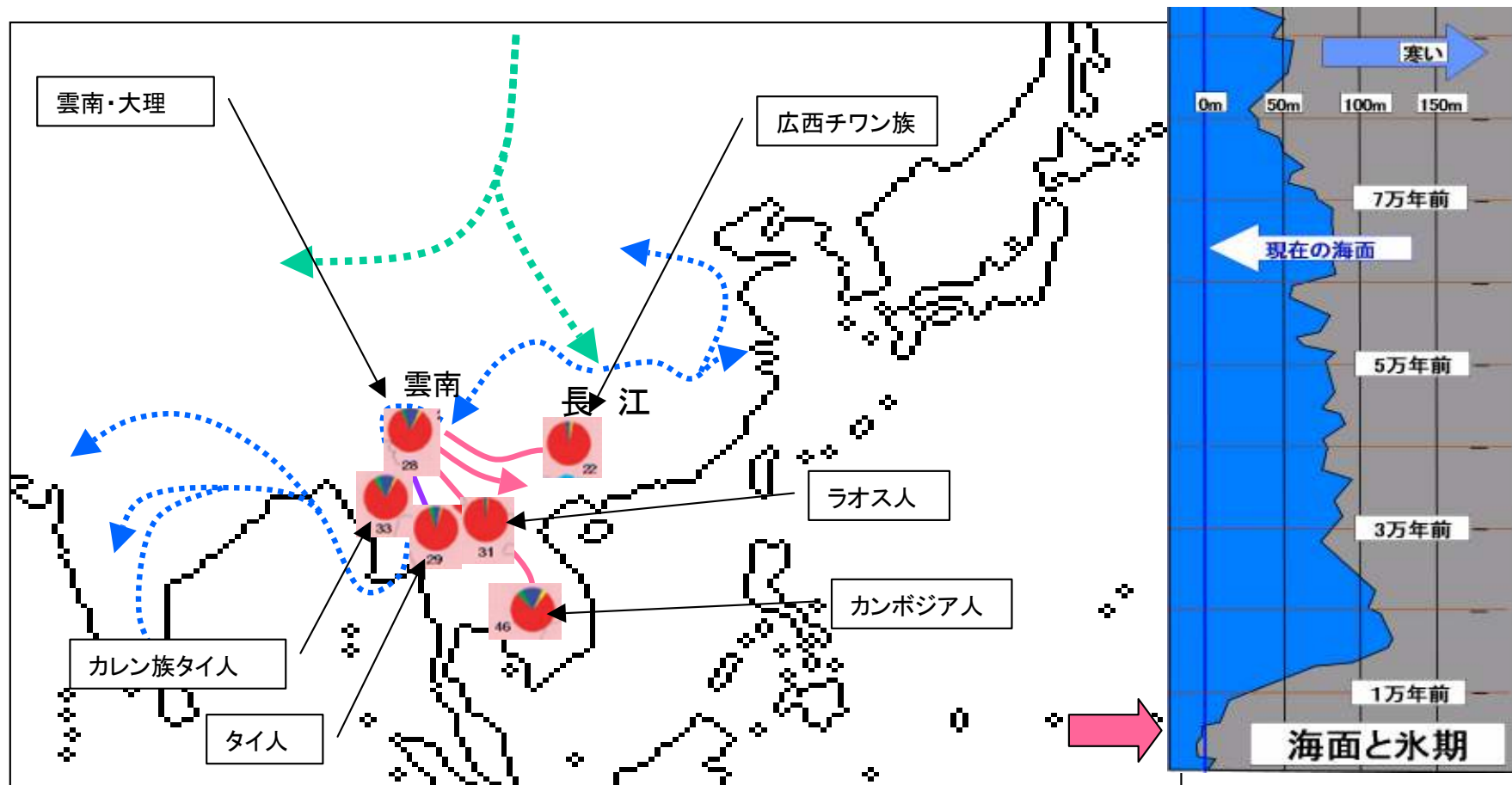
<#>

現代に残る遺伝子で、モンゴロイドの移動ルートをトレースする ③



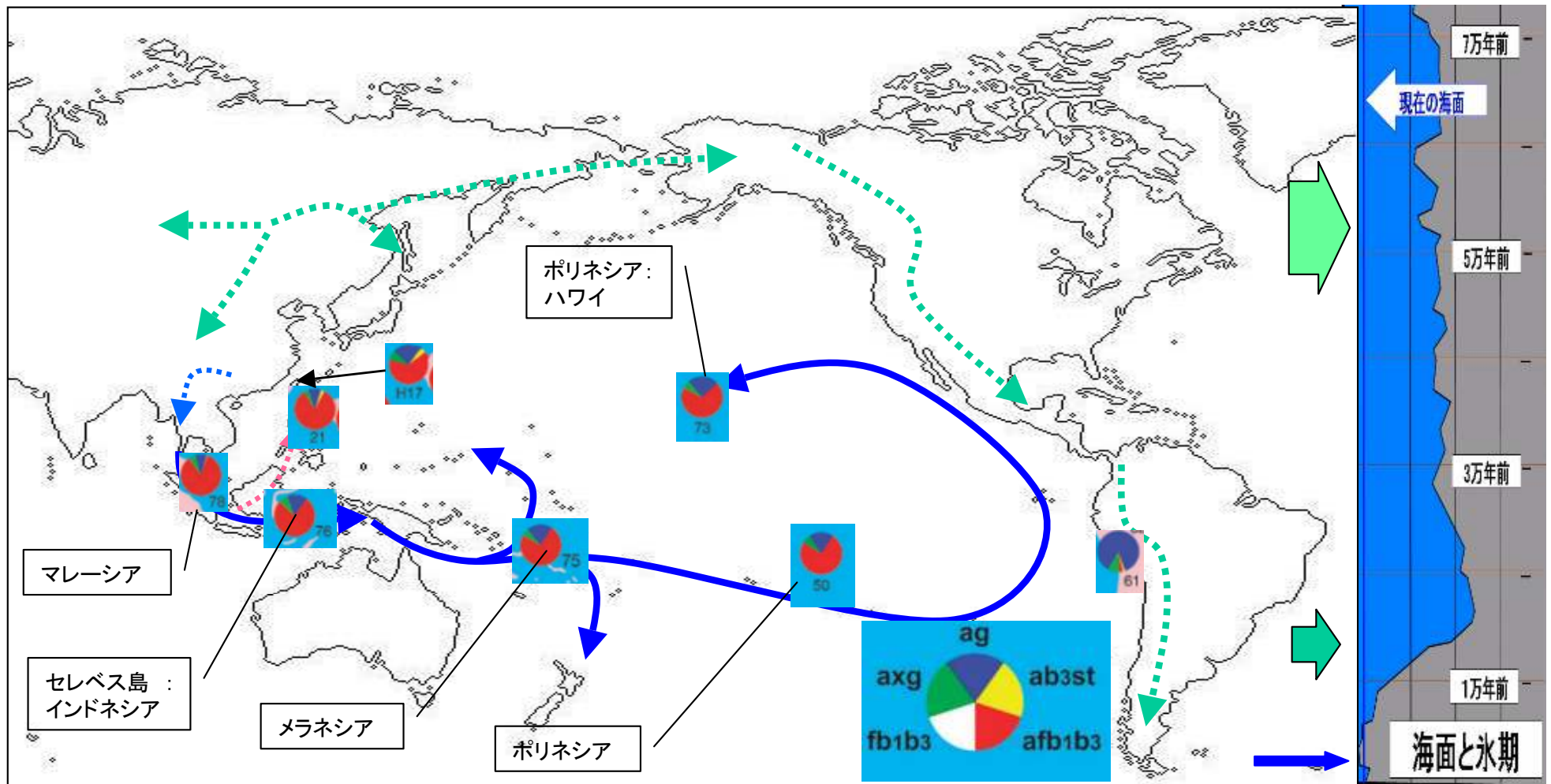
- 新南方型との混血の少なかったチベット族はバイカル族のDNAを保って現代に至っている。
- 日本人の祖先である倭人・東夷は、このチベット族と同様のDNAを持っていたと想像する。
- 一方、新しい南方型のモンゴロイドはも北上し、雲南・四川にまで達していた。雲南の大理族などは、その血を今に残している。
- 長江の上流域(四川・貴州)は、その後、南方型との混血が進み、北方型と南方型の間隔的なDNAを残した。下流でも、同様に混血が進んだと想定。
- 水田・稲作技術を持った倭人・東夷＝タミル・ドラビダ族は、南方型モンゴロイドが北上した道を逆にたどり、南下し、ビルマの平地までおり、海岸線を北西に向かいアッサム・インドへ移動。
- 稲作技術と青銅の技術を持ったモンゴロイドは、インド全域で人口を増やしたが、インド大陸の北部では、西方からコーカソイド・アーリア族の侵略を受けた。その結果、移住モデル2-aのように、男性は皆殺しにされ、女性は娶られたことが、ミトコンドリアDNAの結果に残されている。(インド人のmtDNAはモンゴロイドを示す)
- モンゴロイドのタミル・ドラビダ族は、インド大陸南方とセイロンで生き延びたが、北方型モンゴロイドとアーリア人の混血と考えられるDNAが残る。

現代に残る遺伝子で、モンゴロイドの移動ルートをトレースする ④



- 雲南から怒河沿いに南下した北方型モンゴロイドとは別に、稲作技術を習得した南方型モンゴロイドも河川沿いに降り、人口を増やしたことが認められる。
 - 雲南の大理に残ったDaili族は、孤立して、古くからの民族のDNAを残している。
 - ランツェン河・メコン河を南下しカンボジア・南ベトナム、そしてタイへ
 - ホン河を下り、北ベトナムへ
 - 紅水河を下り、中国南部(広西チワン族自治区)へ
- 新天地への移動1aモデルに該当し、遺伝子が偏る-純化していく傾向が見られる。ラオス人・チワン族。
- タイ人・カンボジア人には、北方型の血が混じっている。

現代に残る遺伝子で、モンゴロイドの移動ルートをトレースする ⑤



- 北方型モンゴロイドの技術と血を受け入れた新南方型モンゴロイドは、マレーシア、インドネシア、メラネシア、ポリネシア、ハワイへと広がる。
- ペルーのケチュアには、南方型のafb1b3の遺伝子が入っており、ポリネシア人となったモンゴロイドの血が混じったことが伺える。

モンゴロイドの移動ルートの検証 1/2

- 北方型・バイカル地方起源のモンゴロイドと南北アメリカ・インディアンの祖先が同一である事は理解できるが、南下し赤道を越え、オーストラリアに定着し、アポリジとなることした松本論文は、あまりにも不自然。
 - この試論のように、スンダ大陸から、早い時期にオーストラリアに移住し、やはり同じスンダ大陸から、北上したモンゴロイドが、バイカル地方へ到達し、そこからベーリング海峡を越えアメリカに入ったとする方が自然。DNAもその通りに解釈できる。
- 埴原和郎の提唱した「二重構造モデル」を、ベースとした、「身体的な計測値は、現在の若い世代の体格から十分理解されるように、短い期間で、栄養や環境や文化によって、簡単に変わることが知られている」ので、「時代遅れの、不確かな方法」と、松本論文が断定した事について
 - 南方型のモンゴロイドが、極寒冷気候に対処することで、身体的な形態が変わることは、松本さんの論旨通りで、スンダドントの歯型もシノドントに変わったと思われる。
 - 松本説では、バイカル地方から移住してきたヒトの子孫がアイヌになっているが、北方系の体形のヒトが寒冷な北海道で、立体的な目鼻立ちの、南方系の体形に短期間で変われるのだろうか？ 不自然な論理。
 - 南方から移動してきたモンゴロイドが、沖縄・アイヌ人で、南方系の身体的形質を残した方が自然。同じ系統の人が、極寒の期間に、手足の短いずんぐりとした体形とのっぺりした顔立ちの北方系に変わったとすることも、自然。
- 中国黄河文明よりも前に生まれた長江文明が明らかになり、稲作の原産地が長江中流とされたことと、稲作と稲作を行う民族の広がり、DNAの解析と矛盾無い事が判明。
 - 稲作は、小麦などの他の作物に比べ圧倒的に高い生産性を有している。稲作の展開とそれに伴う人口に爆発的増大がモンゴロイドの移住・拡散に大きな契機となっていると理解できる。
- インダス文明に関して
 - インド人がミトコンドリアDNAの解析から、母系はモンゴロイド、父系はコーカソイドと云われていた。
 - インダス文明が、米一稲作の文明であることが近年明らかにされた。長江中流の原産地から雲南を経由し、インドにもたらされた米と稲作は、モンゴロイドが移住と共にもたらしたものと推定される。
 - そのモンゴロイドは、DNAの解析から、日本人に類似し、コーカソイドの混血をうけたものと推定される。
 - 日本語と同一起源と考えられるタミル語は、同一起源の民族とDNAの解析からも理解できる。

モンゴロイドの移動ルートの検証 2/2

- その外の遺伝子情報から

- 1 篠田謙一と金井理の分析や、最新の篠田の著書によると、中妻遺跡から発掘された縄文人骨の多くは、日本人の1.3%(低頻度)にしか存在しない、mtDNA M10遺伝子を持っており、またバイカル地域に住んでいるブリアートのDNAもそれと同一の塩基配列を持っている。
- 2 1986年春、アメリカのフロリダで発見されたミイラ化したヒト(アメリカ・インディアン)の脳細胞からえたミトコンドリアDNAを解析したところ、日本人5人と共通するタイプの配列だったことが明らかになった。(モンゴロイドの地球3の第4章から)
- 3 埼玉県浦和で発掘された縄文人と推察される頭骨からミトコンドリアDNAを解析した処、マレー人とインドネシア人と一致した。(モンゴロイドの地球3の第4章から)

これをつぎの様に理解する。

- 1 北上する途中で日本に残留した女性中に母親を同じくする姉妹あり、途中で別グループに別れ、片方の人はバイカル地方へ到着し、双方、子孫を残した。
- 2 北上する途中で日本に残留した女性の姉妹がバイカル地方へ到着、世代を重ねた後に、遠征を重ね、ベーリング海峡を越え、アメリカで子孫を残した。
- 3 スンダ大陸にモンゴロイドの姉妹があり、一方は大陸に残り、他方は、北上した。北上の途中で日本に残留し、その子孫が浦和に住んでいた。スンダ大陸に残った方も、幸いに、マレーとインドネシアに子孫を残した。

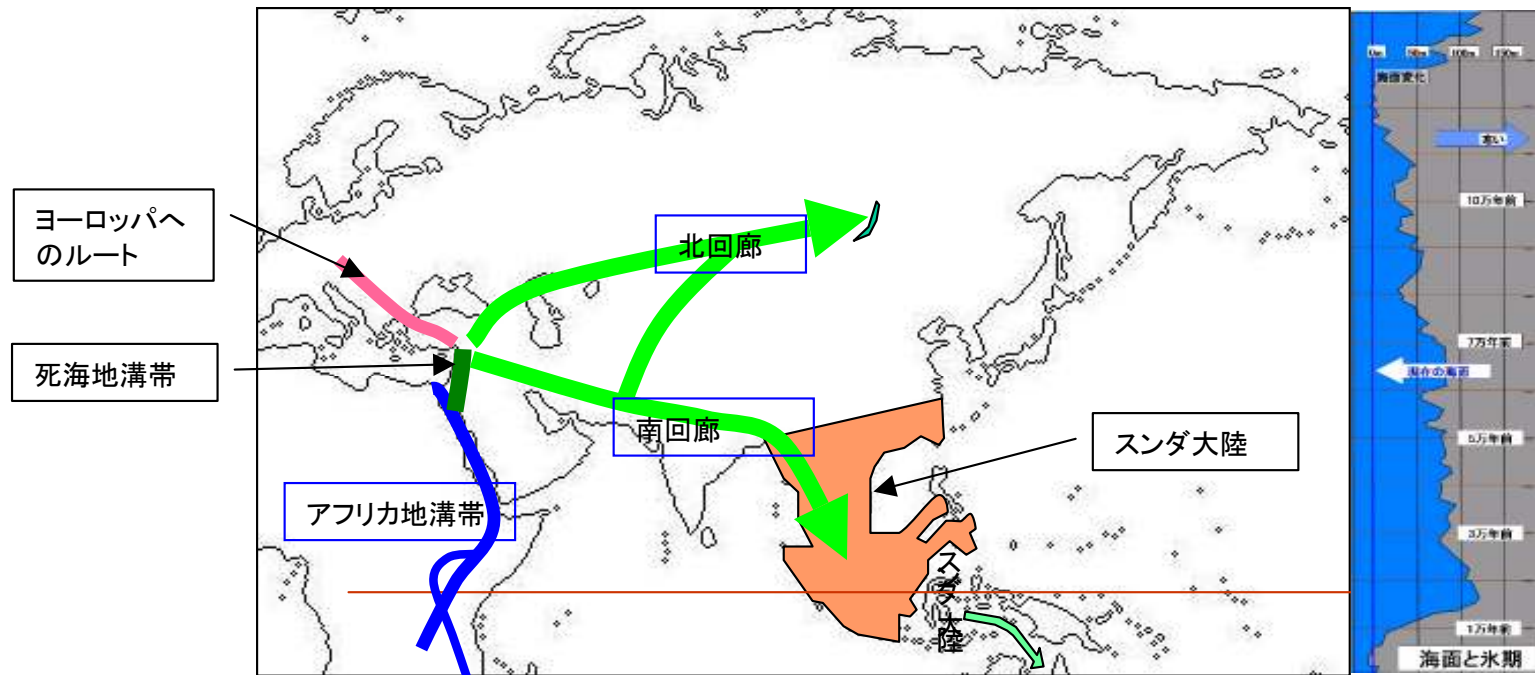
同じ遺伝子を持った人が、別のところ(A地点とB地点)で発見された事は、AからBへ移動したと断定は出来ない。BからAへの可能性もあるし、共通する地点Xから一方はAへ、他方はBに移動した可能性がある。この全ての可能性を正しく、理解することが必要。

上記の3例から、例示したルートが一番可能性が高い。(バイカル地方からマレー・インドネシアに行くルートは、可能性が極めて少ない)

- モンゴロイドのバイカル地方発生説は有り得ない。

- 松本説では、モンゴロイドの発生がバイカル地方と雲南の2箇所となっている。
- 新人類の出アフリカ後、2つのルート南回廊、北回廊があり、北回廊を經由してバイカル地方へ移動し、そこをモンゴロイドの起源としているが、氷河期の厳しさを考慮すると、それは有り得ない。北回廊が開く時期は、温暖化が進んだ後のこと。次に理由を示す。

バイカル地方発祥説は有り得ない

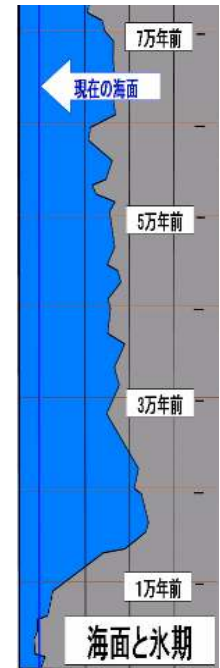


- 現代人と同様の新人が10万年前～20万年前に、アフリカ又は死海地溝帯に出現。
- 5万年前～10万年前に、コーカソイド(白人)とモンゴロイドが分化。
- 新人がアフリカ・死海地溝帯を出発した時期には、
 - 初期人類の食生活・エネルギー元は植物。年間を通じて獲得できる植物性の食物によって生命維持を行い、肉食は主食となり得ない。(モンゴロイドの地球[1]アフリカからの旅立ちに詳細に説明されている)
 - 旅立ちの頃の道具箱(石器類)は、年間を通じて得られる植物性の食物を獲得・加工するもの。副次的な食料として得る動物性食物の獲得・加工の原始的な石器に限られた。(マンモスなどの大型獣を狩るようには進化していなかった)
 - 従って、ルートは、植物性の食料を継続的に得られる温暖なルートが不可欠。
 - ヨーロッパへの新人類の移動は4万年前から。それ以前には、道具箱(石器)の未発達で、食料獲得上困難だった。
- 5万年前スンダ大陸とニューギニア・オーストラリアが海面低下で近い距離にあった時期にモンゴロイドが移動し、5万2千年前からの遺跡を遺し、モンゴロイドとしての遺伝子を保持してきた。
- モンゴロイドの北回廊を通じて移動したとすると、5万年前～10万年前になる。その場合、氷河期が既に始まっており、死海地溝帯から北上あることは、コーカソイドが北上できなかったと同じ理由で困難。イラン・アフガニスタンから北上するルートも高原地帯は氷河で覆われ、食料獲得が困難。年間を通じて獲得できる植物性の食料が無いため、生き続けることは有り得ない。
- 北回廊を移動する可能性は、鋭利な細石刃技術の出現する2万5千年前以降になる。
- 温暖化する1万5千年以降、北回廊を通じての交流が行われた。現代に残るDNAの痕跡は、この交流の結果と考えられる。

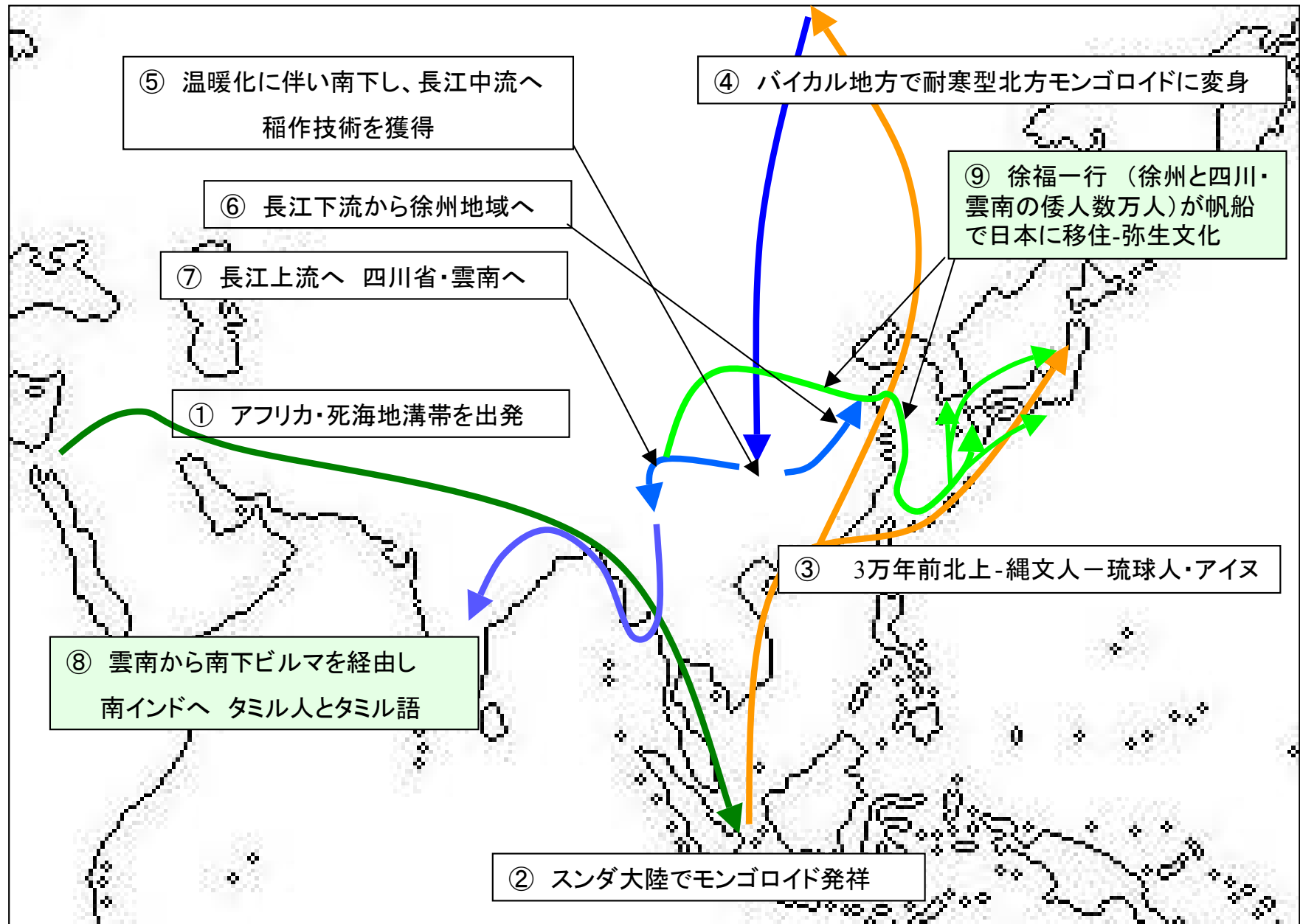
<#>

日本人の起源・サマリー 1/2

- スンダ大陸を3万年前に出発し、北上したモンゴロイドが、氷河期で海面の下がっていた日本近辺に到着。琉球列島・九州・四国・本州・北海道まで、南方の形質を持った人が定着した。縄文人となり、その形質を強く残す人々が、琉球・沖縄にそして、北海道にいる。
- 日本に定着したモンゴロイドの仲間は、西の大陸沿いに進行し、バイカル地方まで到達した。その後、厳冬期が訪れ、比較的温暖であったバイカル湖地方のモンゴロイドは、優れた細石器を開発し、大型動物を食料として生活する方法を獲得し、生存を続けた。その厳冬期に耐える代償として、ずんぐりした体形とのっぺいした顔を持つ、北方型モンゴロイドの形質を備えた。
- 1万5千年前頃、温暖化に従い、南下し始めた大型動物を追い、北方型モンゴロイドも南下。北方型の形質を保ったまま、中国の長江中流近辺に留まった。その地で米・稲作の技術を確認し、人口を急激に増大した。その中に、東夷・倭人と後に呼ばれるグループがいた。(そのグループは、長身・長頭の形質を持ち、甕棺で葬る風習を持っていた。) 屈家嶺遺跡から甕棺出土
- 長江中流で確立した稲作技術を持ち東夷・倭人を含む北方型モンゴロイドは、上流の四川・雲南地方へ移動。長江下流にも移動し、山東半島の南にある徐州近辺へ移動した。(長身・長頭の遺骨と、甕棺を遺す)
 - 中国河南省鄭州市内の黄河中流沿いにある西山遺跡: 城壁構造時の“定礎式”の跡から甕棺(かめかん)出土
- 四川・雲南に移動した北方型モンゴロイドは、雲南から更に南下し、ビルマ(ミャンマー)におり、西へ向かい、インド大陸まで移動。
- インド大陸で稲作を行い、人口を増やした。南インドでは、タミル人が、3,000年前、タミル文化を花開かせ、日本と同じ、五七調の詩歌を残した。タミル語は、日本語と同じ文法と基本語彙を持ち、大野晋さんが日本語と同一語源の言語であること証明した。タミル人は長身・長頭の形質を持ち、甕棺で葬る風習を持っていた。ドラヴィタ族は、東夷を含む北方型モンゴロイドで、その中のタミル人は倭人と考えられる。
- 中国では、夏、殷、周と統一国家の成立期に入り、周の成立期には、東夷の徐夷が反乱を起し、周の軍隊に滅ぼされている。BC1000年頃。この時期に、戦火を逃れ、中国東北部や、韓国南部や九州北部逃れたものと推定される。扶余の数詞に日本語と同一部分が残る。韓国成立の神話は徐州の神話に酷似。北九州・唐津などの早期の稲作の発生時期に繋がる。
- 又、BC482年頃、春秋の戦乱の中で、滅ぼされた呉の末裔が九州北部へ。後漢書に、倭人は呉にゆかりのある「大夫」と自称していたことが記されている。



日本人の起源・図



日本人の起源・サマリー 2/2

- 2,300年前に、秦の始皇帝が中国の国家統一を果たした。始皇帝の軍隊には、四川＝蜀の軍隊と、コーカソイド(白人)の外人部隊が活躍していた。(兵馬俑に残されている)
- 徐州に居た「徐福」は、倭人の存亡を掛けて、3,000人の子供と五穀を持って、「仙人から不老不死の薬をもらおう」と秦の始皇帝を騙り、大船団を建造し、その船団を率いて東方に出帆した。その中核は徐州の倭人と考えるが、蜀の軍隊に居た倭人とその家族と少数ながらコーカソイド(白人)が含まれて居たものと推定。
- BC219年に、徐福一行の船群は、韓国南部を含む、20ヶ所に上陸。徐福の名を残し、その地から稲作に適した地域を探し、永住を始めた。多分、佐賀の開けた土地に徐福本人は上陸し、永住したものと考えられる。
- 稲作に成功した倭人達は、一気に人口を増大し、耕地を広げた。先に住んでいた縄文人とは、協調し、混血をしていったが、倭人の言語と生活が主流となった。比率的には、圧倒的に倭人が多く、縄文人比率は少なかった。
- 徐福一行以前に、細々と稲作技術を持って、追われてきた東夷・倭人が、北九州・玄界灘沿いで、縄文人の管理の下に、稲作を行い、初期弥生文化を築いていた。
- 佐賀の上陸していた徐福の一族が、吉野ヶ里から筑後平野にクニを築き、北九州の玄界灘沿いのクニとの戦いを征し、邪馬台国を造り上げた。吉野ヶ里など北九州の各地に甕棺の墓地遺跡が発掘されている。
- 日本各地に上陸した「その他の徐福」一行は、出雲、瀬戸内、近畿、中部、関東、北陸、越後、秋田の各地で稲作を行い、人口を増やし、弥生文化を築いていった。
- 九州甘木地方の邪馬台国の後裔が東遷し、大和朝廷となり、日本全土をやがて支配することになった。

追記:

- 徐福一行の中にいたコーカソイド(白人)の子孫は、関東の筑波山の麓、真壁で繁栄し、特に女性は色白で美しかった。戦国1602年、真壁氏は秋田の角館への移封の際に、一族の女性達を引きつれ移住した。誉れ高い秋田美人には、白人の血が流れていたと推定される。
 - JCウィルスの解析から、日本人の中に、白人特有のEU型を持つ人が、日本海側に居るとの研究結果が発表されている。弘前、秋田、仙台に1, 2割ほどいるとのこと。
- 沖縄県与那国島の100m沖、海底20mの所で、石作りの巨大遺跡が発見されている。10,000年ほど前、海面が下がっていた時代に、今よりもずっと広い島で繁栄した縄文人の築いた遺跡では？

参考文献

- The origin of the Japanese race based on genetic markers of immunoglobulin G 「免疫グロブリンGの標識遺伝子に基づく日本民族の起源」、大阪医科大学名誉教授:松本秀雄著
- モンゴロイドの地球 東京大学出版
 - [1] アフリカからの旅立ち 赤澤威編
 - [2] 太平洋との出会い 大塚柳太郎編
 - [3] 日本人のなりたち 百々幸雄編
- 日本人の起源 古人骨からルーツを探る 中橋孝博著 講談社選書メチエ
- 日本人の誕生 人類はるかなる旅 埴原和郎著 吉川弘文館
- 日本人はどこから来たのか 埴原和郎編 作品社
- 日本人になった祖先たち DNAから解明する多元的構造 篠田謙一著 NHKブックス